

かわ た な じ ょ う り あ と
川 棚 条 里 跡

こもいけ であい ふじもと
(菰池地区・出合地区・藤本地区)

—平成11年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

2000

財団法人 山口県教育財団

山口県埋蔵文化財センター

序

山口県では、恵まれた自然環境を保全しつつ、豊かな地域環境の創造に向け、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

地域によっては、こうした開発事業に伴い、地下に埋もれている歴史的遺産である遺跡等の消失が危惧されることから、財団法人山口県教育財団では、関係機関との調整を図りながら、必要な範囲等について発掘調査を行い、その結果を記録として留め、郷土を築いてきた先人の足跡を後世に残すこととしております。

本書は、平成11年度豊浦郡豊浦町川棚地区の県営ほ場整備事業に先立ち、同地内に所在する川棚条里跡（菰池地区・出合地区・藤本地区）について、当財団が実施した発掘調査の記録をまとめたものであります。

調査の結果、古墳時代に営まれた集落跡や古代の条里制に関係すると考えられる溝等の遺構を検出するとともに、縄文時代から中世に至る数多くの遺物が出土し、当時の人々の生活文化の実態を知る上で、貴重な資料を得ることができました。

本書が、文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究としての資料、また、郷土史実の基礎資料等として、広く活用されることを願うものであります。

終わりに、当発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたり、御指導・御協力いただきました関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成12年3月

財団法人山口県教育財団

理事長 牛見 正彦

例 言

- 1 本書は、山口県豊浦郡豊浦町川棚に所在する川棚糸里跡（菰池地区・出合地区・藤本地区）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、県営ほ場整備事業に伴い、財団法人山口県教育財団が山口県の委託を受け実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
調査担当 指導主事 鈴木 卓
指導主事 榎山 茂樹
文化財専門員 石井 龍彦（山口県教育庁文化財保護課）
- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、山口県農林部農村整備課、豊田農林事務所、豊浦町農林水産課、豊浦町教育委員会並びに地元関係各位の協力、援助を得た。
- 5 石製品については、山口県立博物館専門学芸員亀谷敦氏に表面観察による石材鑑定を依頼した。
- 6 図1は、国土地理院発行2万5千分の1地形図「川棚温泉」を複製使用した。
- 7 図2は、豊浦町発行「豊浦町都市計画図」を複製使用した。
- 8 図3は、豊浦町税務課が保管している川棚村の字図（明治21年1月調査）を参照し、豊浦町発行「豊浦町都市計画図」を複製使用して作成した。
- 9 挿図の方位は国土座標（第3座標系）の北、標高は海拔標高で示した。
- 10 菰池地区、出合地区、藤本地区という地区名は、旧小字名による。
- 11 土色の色調表記は Munsell 方式による。

（農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』）
- 12 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 13 土器実測図のうち、断面黒塗は須恵器、網掛けは丹塗りを示す。
- 14 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SB：住居跡 SK：土坑 SD：溝 SP：柱穴 SX：その他 TR：トレンチ
- 15 本書の作成及び執筆は、鈴木、榎山、石井が分担して行い、編集は鈴木が行った。

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 発掘調査について	3
III 条里の概要	5
IV 遺構について	9
V 遺物について	31
VI まとめ	42



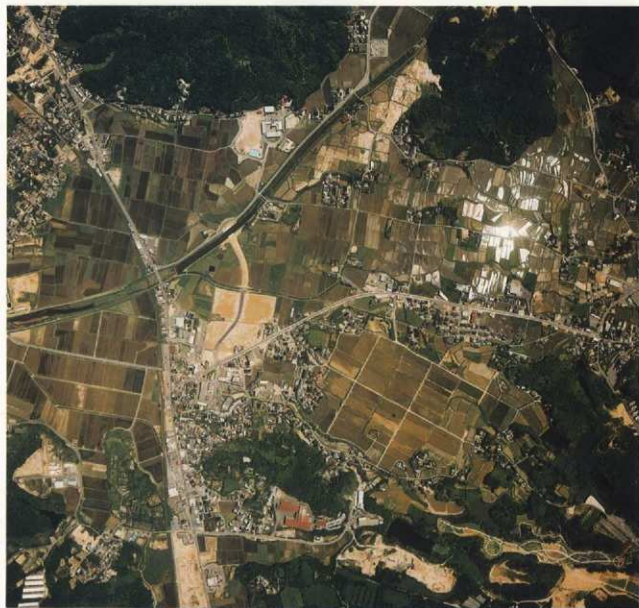
S D01 作業風景

図版目次

- 図版1 川棚条里跡全景
図版2 TR11で出土した漆器
図版3 出合地区の集落跡
図版4 SB01南から SB03・SK03南から
SB04南東から SB04・05南西から
図版5 SB06北西から SB06遺物出土状況
SB03遺物出土状況 SK09遺物出土状況
図版6 SD01北東から望む 南西から望む
図版7 SD01土層断面
図版8 出合地区IIの土坑群 SK10北東から
SK11北東から SK16北東から
図版9 SK17・18北東から SD01井堰検出状況
SX01検出状況
図版10 トレンチ土層断面(1)
図版11 トレンチ土層断面(2)
図版12 出土遺物(縄文土器1)
図版13 出土遺物(縄文土器2)
図版14 出土遺物(弥生土器・土師器)
図版15 出土遺物(土師器)
図版16 出土遺物(土師器・須恵器・木製品)
図版17 出土遺物(扁平打製石斧)
図版18 出土遺物(石製品・土製品)

挿図目次

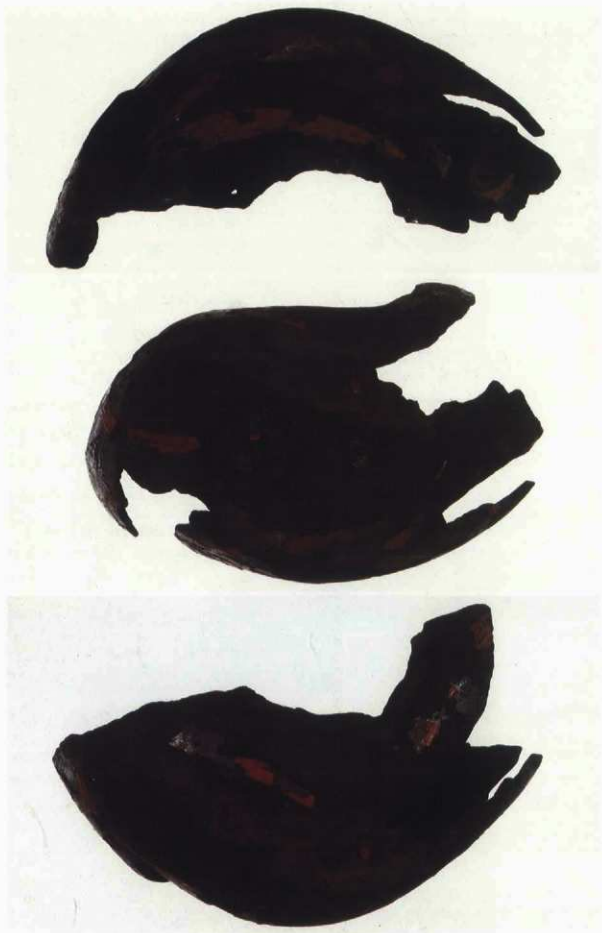
- 図1 周辺の主な遺跡
図2 調査区的位置
図3 川棚条里跡関係小字図
図4 藤本地区Iの様子
図5 藤本地区IIの様子
図6 菰池地区の様子
図7 出合地区Iの様子
図8 出合地区II・IIIの様子
図9 SB04・05実測図
図10 SB03・SK03実測図
図11 SB01・02・06・SK04実測図
図12 SD01土層断面実測図
図13 SD01井堰検出状況実測図
図14 土坑実測図(1)
図15 土坑実測図(2)
図16 土坑実測図(3)
図17 トレンチ土層断面実測図(1)
図18 トレンチ土層断面実測図(2)
図19 トレンチ土層断面実測図(3)
図20 トレンチ土層断面実測図(4)
図21 トレンチ土層断面実測図(5)
図22 SX01実測図
図23 縄文土器実測図(1)
図24 縄文土器実測図(2)
図25 弥生土器実測図
図26 土師器・須恵器実測図(1)
図27 土師器・須恵器実測図(2)
図28 土師器・須恵器実測図(3)
図29 木製品・石製品実測図
図30 扁平打製石斧実測図(1)
図31 扁平打製石斧実測図(2)
図32 石製品・鉄製品・土製品実測図



川欄条里跡全景



南上空から▶



TR11で出土した漆器

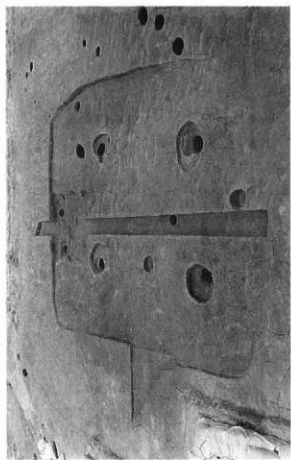
出合地区の集落跡



南西から望む



図版4



SB04 南から



SB04・05 南西から



SB01 南から



SB03・SK03 南から



SB03 遺物出土状況



SK09 遺物出土状況

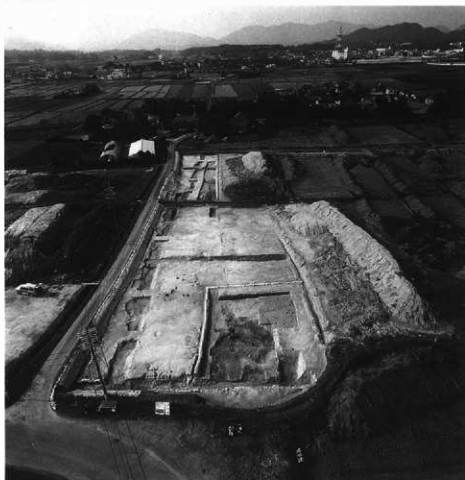


SB06 北西から



SB06 遺物出土状況

図版6



S D01

北東から望む



南西から望む



D-D'



E-E'



F-F'



A-A'



B-B'



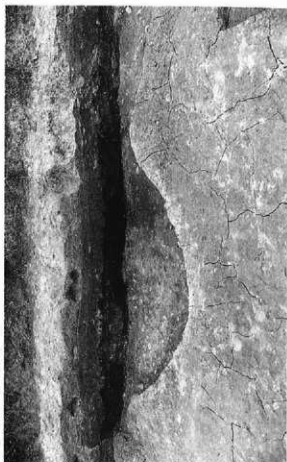
C-C'

SD01 土壤断面

図版8



SK11 北東から



SK16 北東から



出合地区IIの土坑群 北西から



SK10 北東から



S X 01 検出状況①



S X 01 検出状況②



S K 17・18 北東から



S D 01 井堀検出状況



TR02 北西壁



TR02拡張部 北東壁



TR14 北東壁



TR11拡張部 北西壁 (東側)



TR11拡張部 北西壁 (中央)



TR11拡張部 北西壁 (西側)

トレンチ土層断面(1)



TR03-05間 北西壁



TR06 北東壁 (南側)



TR06 北東壁 (中央)

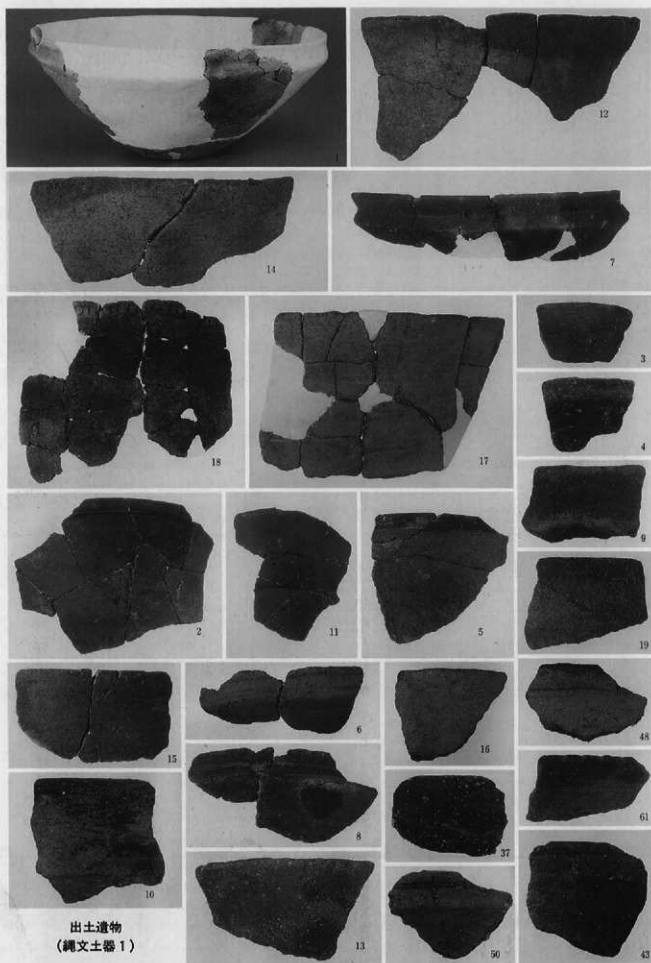


TR09 北西壁

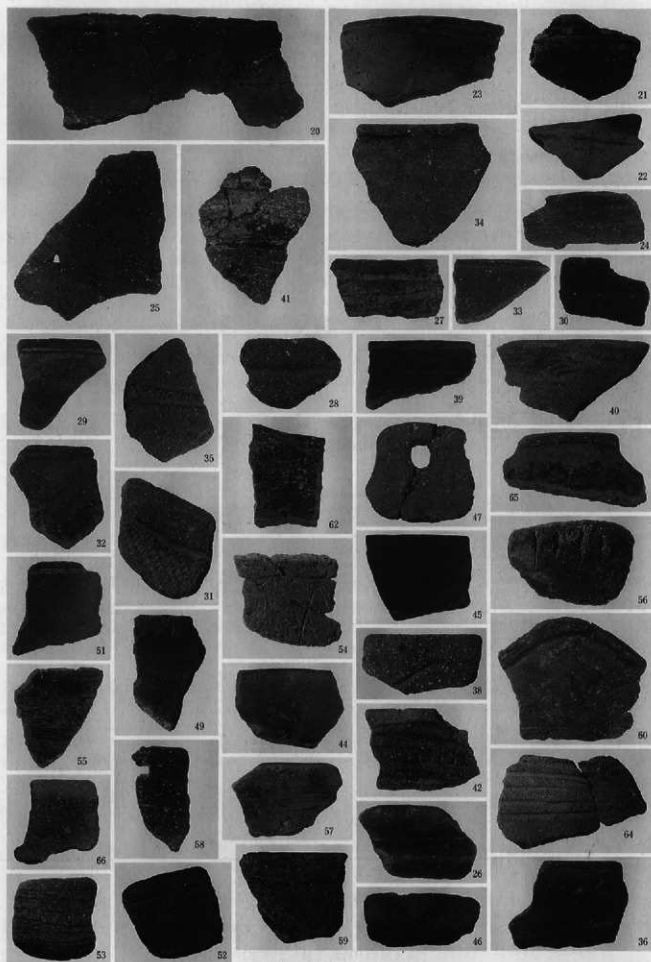


TR06 北東壁 (北側)

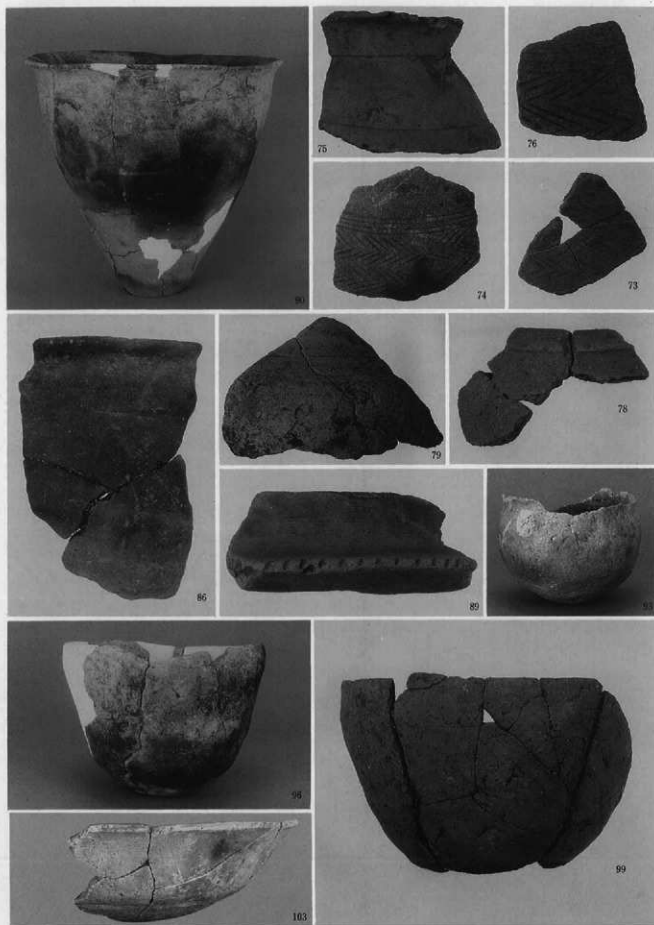
トレンチ土層断面(2)



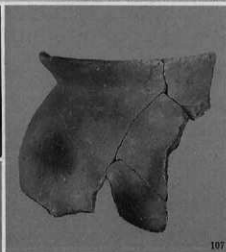
出土遺物
(縄文土器 1)



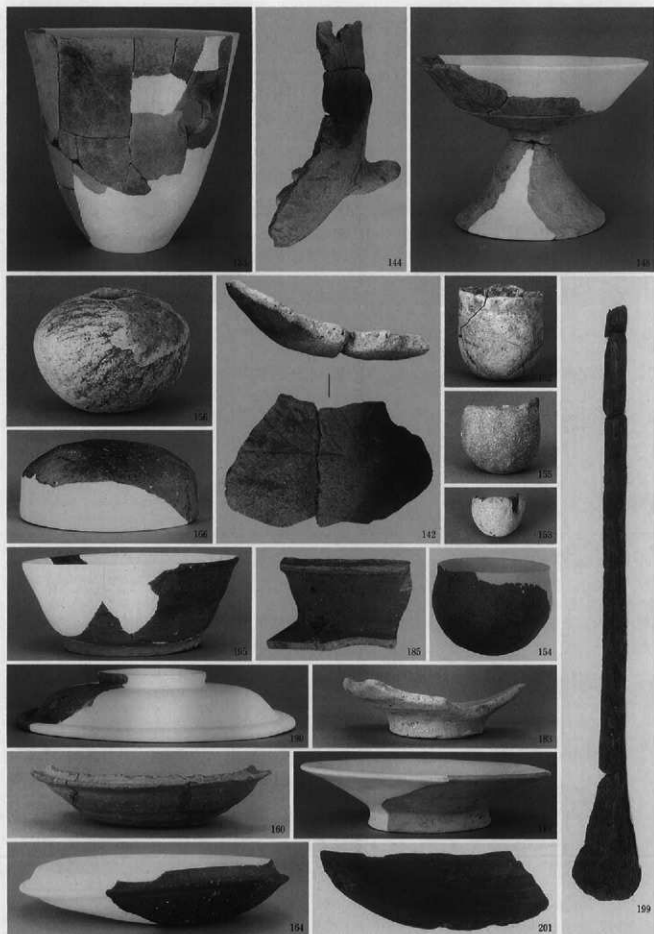
出土遺物 (縄文土器2)



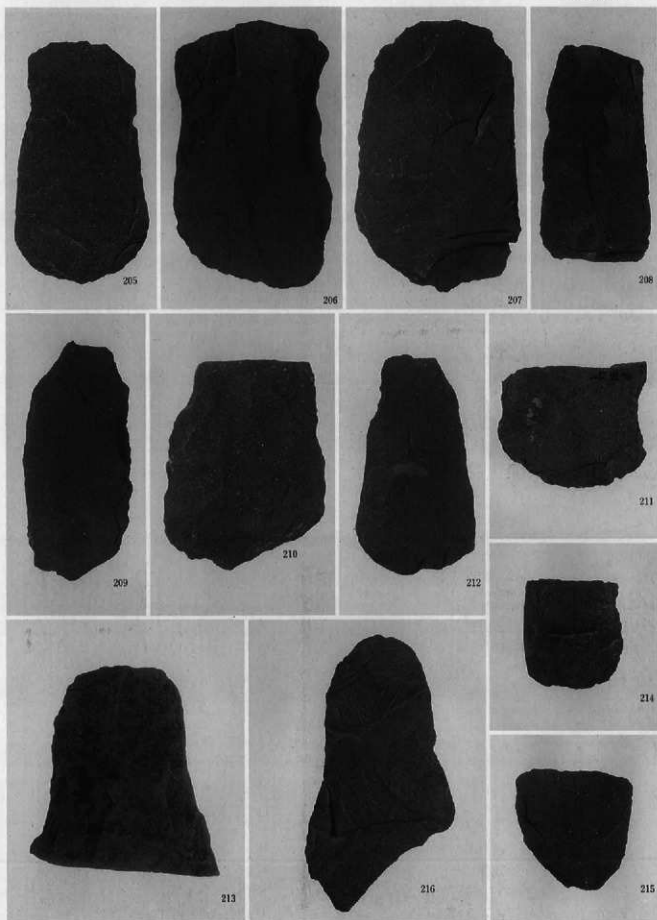
出土遺物（弥生土器・土師器）



出土遺物（土師器）

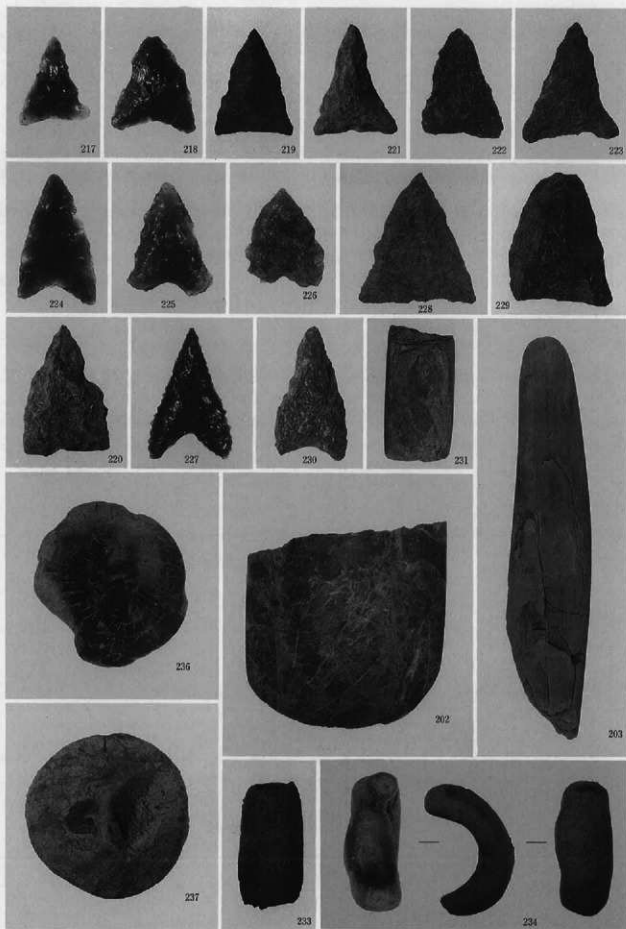


出土遺物（土師器・須恵器・木製品）



出土遺物 (扁平打製石斧)

図版18



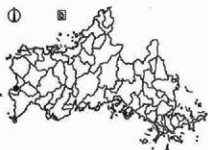
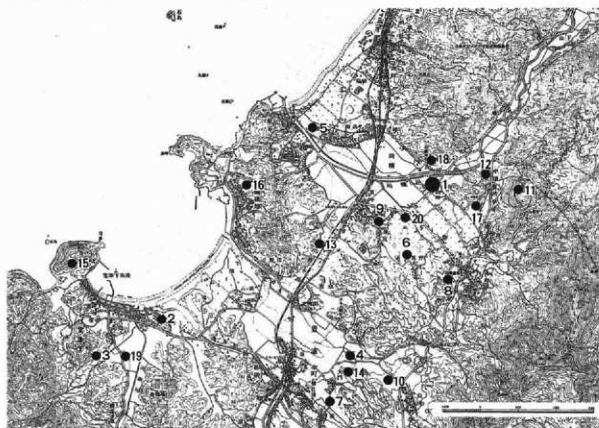
出土遺物（石製品・土製品）

I 遺跡の位置と環境

川棚条里跡（菰池地区・出合地区・藤本地区）は、豊浦郡豊浦町大字川棚に所在する。

豊浦町は、山口県の西端に位置し、三方を中国山地最西部をなす豊浦山地に囲まれ、西方は響灘に面する。北の狗留孫山（616.3m）、東の狩音山（577m）・鬼ヶ城（619.6m）は、比較的急斜面の山地帯であり、多くの交通路は南に開かれている。低地は、川棚川・吉永川・黒井川などの小河川により形成された谷底平野と沖積平野、高野・厚母郷などの洪積台地からなる。この豊浦低地は、低地の乏しい響灘沿岸地域の中では大きな面積を持つものといえる。また、この地域では、冬期に北西の季節風が卓越するが、沿岸を北上する対馬暖流の影響を受けて、比較的暖かで雪も少なく、年間を通じて温暖な気候である。このような自然条件は、人々に住みよい生活環境を与えてきたと考えられ、古くから人々が住みついたこともうなづける風土といえる。

本遺跡は、川棚川によって形成された谷底平野及び氾濫原に立地している。向日山（標高75m）という低丘陵の西方、川棚川左岸に位置する、一般に向群と呼ばれる地域である。標高は5～9mで、調査区全域が古くから水田として利用されている。



1. 川棚条里跡(菰池地区・出合地区・藤本地区)
2. 松原遺跡
3. 法仙庵遺跡
4. 吉永遺跡
5. 中ノ浜遺跡
6. 高野遺跡
7. 大門遺跡
8. 宝蔵寺遺跡
9. 林崎遺跡
10. 船頭遺跡
11. 城山遺跡
12. 向日山遺跡
13. 無田遺跡
14. 大門古墳
15. 甲山古墳群
16. 心光寺古墳群
17. 向日山古墳群
18. 川棚神社裏古墳
19. 下岡田遺跡
20. 下岡田遺跡

図1 周辺の主な遺跡

豊浦低地は、響灘沿岸地域において有数の遺跡密集地帯であり、洪積台地上やその縁辺部、また海岸沿いにかけて数多くの遺跡が存在する。以下、本遺跡に関わりの深い縄文時代から古代までの、当地域の主な遺跡について概観してみる。

町域における縄文時代の遺跡の分布は希薄である。松原遺跡では、砂丘から後期の土器片が、法仙庵遺跡では、包含層から晩期の土器片が発見されている。また、吉永川中流域の吉永遺跡からは、掘立柱建物跡・土坑が検出され、後期から晩期の土器片・扁平打製石斧・土偶が出土した。発掘調査による縄文時代の遺構・遺物の発見例は県内においても少なく、貴重な資料となっている。

弥生時代に入ると遺跡数は飛躍的に増加する。これは、農耕文化を携えた人々が、水稻耕作に適した当地域に移住してきたことを示している。川棚川の河口に発達した砂堆地に立地する中ノ浜遺跡(弥生時代前期～中期初頭)は、豊北町の土井ヶ浜遺跡、下関市の梶栗浜遺跡と並ぶ響灘沿岸を代表する埋葬遺跡であり、土坑墓・箱式石棺墓・配石墓・甕棺墓が確認され、90体を超える人骨が検出された。この時代の集落跡としては、広い洪積台地上に立地し、豊浦地区の前期後半における中心的集落と考えられる高野遺跡、前期末の土坑群が検出された黒井川中流域の大門遺跡、中期の貯蔵用とみられる袋状土坑が多数発見された高野台地高位の宝蔵寺遺跡、後期の住居跡や溝が検出された船頭遺跡、高野台地の縁辺部にあたり終末期の竪穴住居跡が検出された林崎遺跡、終末期の拠点集落とされる吉永遺跡等がある。また、弥生時代中期の社会的緊張はこの地にも及び、城山遺跡(標高193m)、向日山遺跡などの高地性集落を成立させている。川棚温泉駅の南に広がる低湿地帯にある無田遺跡には、前期の水田遺構の存在も想定され、田下駄や木製農具・石包丁などが出土した。

古墳時代には、町域各所の丘陵に多くの古墳が築かれる。豊かな生産基盤に支えられた、経済的に水準の高い集落が存在していたと推測される。吉永川左岸の丘陵にある大門古墳は、墳丘長36mの規模を持つ、6世紀前半の前方後円墳である。室津湾周辺には、6世紀後半から7世紀初頭にかけて造営された群集墳で、その数は100基を超えるとみられる甲山古墳群、大陸との交流を示す新羅系の陶質土器が副葬されていた心光寺古墳群等、特に多くの古墳が存在する。本遺跡のそばにも、4基の円墳からなる向日山古墳群があり、川棚川をはさんだ向かいの低丘陵では、川棚神社裏古墳などいくつかの古墳が確認された。古墳時代の集落跡としては、前述の船頭遺跡・吉永遺跡・高野遺跡・林崎遺跡等があり、住居跡が複数検出されている。

古代には律令制がしかれ、この地は長門国豊浦郡に属した。この体制のもとでは、条里制と呼ばれる農地区画制度が施行され、税制の基盤となった。県内各地でその遺構が認められており、豊浦町域でも、川棚と黒井で施行されていたとの指摘がある。この時期の遺跡としては、吉永遺跡と高野遺跡で、奈良時代の建物跡の検出と土器の出土が、古墳時代からの集落跡である室津の下岡田遺跡で、奈良時代の土馬や瓦の出土が、高野台地北瀬の下岡遺跡で、平安時代の土坑の検出が報告されている。

(眉山)

参考文献

- 豊浦町史編纂委員会 「豊浦町史」1979年、「豊浦町史Ⅱ」1982年、「豊浦町史Ⅲ考古編」1992年
財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会 「船頭遺跡」1994年、「船頭遺跡Ⅱ」1995年
山口県埋蔵文化財センター 「吉永遺跡」1998年、「吉永遺跡(Ⅲ-東地区)」1999年、
「高野遺跡(北地区)」1999年

II 発掘調査について

1 調査に至る経緯

山口県内各地で推進されている農業基盤整備事業は、これに伴う開発工事により埋蔵文化財に影響を及ぼすことがある。そこで山口県教育委員会は、関係機関と協議し、その現状保存が困難な範囲について記録保存のための発掘調査を実施してきた。

川棚川下流域、豊浦町川棚の低地には、現存する地割から糸里遺構の存在が指摘されていたが、これを含む地域が県営ほ場整備事業（豊浦第2地区第1換地区）の対象地となった。そこで平成10年度に山口県教育委員会が事前の試掘調査を実施したところ、糸里遺構とみられる溝などを確認した。この結果を踏まえて、山口県教育委員会は山口県農林部農村整備課と協議を行い、事業の計画に合わせ、平成11年度から発掘調査を実施することとなった。そして、山口県農林部及び文化庁の国庫補助を受けた山口県教育委員会から調査を委託された財団法人山口県教育財団の山口県埋蔵文化財センターと、豊浦町教育委員会が分担して調査することになった。

今年度の発掘調査は、菰池地区、出合地区、藤本地区を山口県埋蔵文化財センターが、壘地区、大浦地区を豊浦町教育委員会が担当した。山口県埋蔵文化財センターの調査面積は約7,000㎡である。

2 現地調査の経過

山口県埋蔵文化財センターは、事前の準備作業を行った後、平成11年5月6日に現地調査を開始した。まず藤本地区で重機による表土除去に着手、5月11日から人力による作業を始めた。

遺構検出作業によって出合地区Ⅰで集落跡を確認したため、この調査を先行した。次に各地区でトレンチを掘り込んで糸里遺構を追求したところ、坪境に掘られたとみられる溝を2条確認した。そのうちSD01は調査区内のほぼ全体を調査できたが、これに直交する溝については、現在の用水路と重なっていたため全体を掘り込むことができず、土層断面を記録するにとどめざるを得なかった。このほか、井堰状遺構（SX01）を検出したTR02、縄文土器が多数出土したTR03、多数の縄文土器とともに漆器、木製品が出土したTR11・12などを拡張して掘り下げ、最後に出合地区Ⅱの西端で検出した土坑群を調査した。

空中写真撮影については、8月11日に集落跡を中心とした撮影、10月30日にSD01を中心とした撮影を実施した。また、県営ほ場整備事業の工事によって改変される前の地形を記録する目的で、川棚糸里跡全体の空中写真測量を行った。

現地調査は、10月30日に現地説明会を開催して一般の方々に調査成果を公開した後、11月8日に終了した。

3 資料整理

出土遺物は、山口県埋蔵文化財センターに随時持ち帰って洗浄及び復元を行った。実測、拓本及び写真撮影による記録は、現地調査終了後に行った。洗浄、復元及び拓本については山口県埋蔵文化財センターの嘱託及び臨時職員が行い、実測及び写真撮影については調査担当者が分担して実施した。

こうして現地調査で得た資料と遺物整理で得た資料を総合的に整理、考察して、報告書を作成した。

(鈴木)

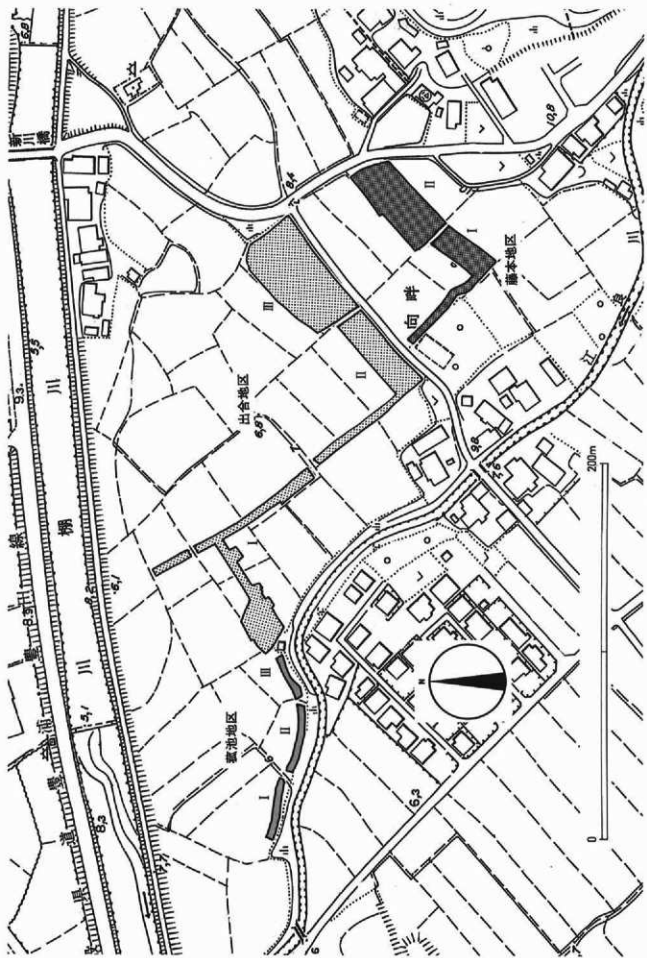


図2 調査区的位置

Ⅲ 条里の概要

川棚低地一帯は、航空写真でみると、条里遺構がかなり判然としている。この条里遺構は、北を中心に40度ずれており、地形に条里の方位が制約されているとみられることが「豊浦町史二」に記述されている。また条里遺構のみられる範囲は45町歩に及ぶといわれ、前坪・大坪などの坪地名があることも指摘されている。

現在の2,500分の1地形図(都市計画図)で確認すると、川棚川を挟む低地一帯に条里状地割が確認できる。現在の地表面に残る表層条里の方位は北西-南東方向の軸線が北から40°30'あまり西に振れている。区画の一辺は約109mであり、ほぼ一町にあたる。現在残る表層条里の状況から推定したおおよその施行範囲は、図3の小字図上で、北西は畦田・川原・宮ノ後・宮地・曲田・吉延・亀田あたりまでである。同じく、南東は田尻・岩光・大塚・寺田あたりまで、北東は畦田・前坪・後楽・古川・出合・藤本・秋光・甲田・田尻あたりまで、南西は亀田・鐘付面・田部国あたりまでである。この範囲の面積は、およそ70-90町歩に及ぶ。

北西-南東方向の坪境は川棚川の北側では4本がほぼ現道と一致し、南側でも御幸橋から南東に直線的に延びる道がほぼ坪境に一致する。この他にも坪境ラインに一致する、1-2町分程度の長さの直線道や水路、地割は多数みられる。川棚川の北側では、北東-南西方向の坪境はほぼ現在の直線的な水路や地割と一致し、南側では今回の発掘調査区の藤本・出合間の道など3本の現道が坪境と一致し、水路や地割が坪境ラインに一致するものも多数みられる。

しかし、条里に関係すると考えられる数詞地名の遺存はみられず、小字名から条里界や条里坪並を推定することは困難である。各坪内割を現存の畦畔等でみた場合、半折型と長地型の割合に大きな差はみられない。

なお、川棚川付近では過去の氾濫に起因する地割が古川(川北)・後楽・竹ノ鼻・菰池・定力・友兼・古川(川南)・池田・吉延でみられ、これらの範囲では条里状地割が失われている。また岩光・甲田・藤本・秋光・大江では、江良川の氾濫による地割の乱れが認められる。

条里状地割の施行時期を推定するため、豊浦町役場税務課に保管されている明治20年の調査に基づいて作成された旧川棚村の字図(600分の1)を参照し、現在の2,500分の1地形図に小字界・道路・水路・地割を写しとり、比較を試みた。その結果、地割の概要は南西部の市街地部分と鐘付面・かうや付近を除き、現況とほぼ一致することが確認できた。さらに小字界も、表層条里の坪境とよく一致することも確認された。この結果から、現在の条里状地割は明治中期以前のものであることは疑いなく、歴史的観点からみて古代・中世にさかのぼる可能性が高いことが判明した。

発掘調査の契機となった果営会場整備事業に先立って、山口県教育委員会が平成10年度に実施した試掘調査で、出合地区及び藤本地区の3箇所坪境にあたる位置に、上幅約4.5mの溝状遺構を検出した。溝状遺構の埋土からは、奈良・平安時代の須恵器・土師器が出土し、埋土の最上位から中世の土師器や瓦質土器片が出土し、古代から中世にかけて機能した溝と推定された。しかし、川棚川に向かって北西方向へのびる低い台地上(図3 小目代・秋光・甲田・友田・岩光・大塚・寺田)では、坪境にあたる遺構は検出されず、弥生時代から中世にかけての集落跡が発見された。

県内の条里遺構は、少なくとも44の地域に分布することが、三浦肇氏によって指摘されている。このうち発掘調査が実施された主な遺跡には防府市下右田遺跡、下関市延行条里跡、豊田町豊田条里跡、山口市湯田条里跡がある。豊田条里跡では、条里に係る明瞭な遺構は確認されていない。湯田条里跡では条里に係る堰状遺構が検出された以外には、目立った遺構は確認されていない。下右田遺跡では、平安時代中期以前に施行された条里の坪境及び半折型地割に伴う区分線とみられる溝が発見されている。

延行条里跡は下関市の綾羅木川下流域一帯に位置し、川棚条里跡と同じく旧豊浦郡に属する。長門国府にも近く、現在確認される条里遺構分布範囲は豊浦郡内で最大である。県内では最も綿密な発掘調査が実施されており、平野内に2つの基準に基づいた条里遺構が確認され、坪界畦畔とそれに伴う水路、耕地界畦畔、道路、条里地割の標示石などが検出されている。水田関係遺構の分布も確認されており、水田畦畔に条里地割に平行するものと地形の制約を受け斜行するもの両者がみられることも明らかにされている。条里方格地割の施行時期は、奈良時代に遡るとされている。延行条里跡では現在も下関市教育委員会によって発掘調査が行われており、各時期の水田経営の実態なども明らかになりつつある。

今回の川棚条里跡の発掘調査で検出されたSD01は坪境の溝とみられるが、方位は後述するようにN52°Eとふれている。しかし、溝が振り替えによって若干湾曲していることから、表層条里の基準方位とは誤差の範囲内であると考えられる。発掘調査区は、江良川などの氾濫の影響を大きくうけており、耕地界畦畔や水田遺構の検出は困難な状況であった。

なお、川棚川の北側でも平成11年度県道建設に先立ち山口県教育委員会が実施した確認調査によって、坪境にあたる1箇所で溝状遺構が検出されており、条里方格地割は、川棚川を挟んで広域にわたって同一基準で施行された可能性が高い。

いずれにしても、川棚条里跡は県内でも数少ない良好な状態で遺存する条里遺構である。発掘調査は今年度を皮切りに5か年にわたって順次実施される予定であり、今回の調査で確認できなかった坪内割に伴う畦畔等の確認や水田の実態把握、集落占地の解明などが期待される。

(石井)

参考文献

- 豊浦町史編纂委員会「豊浦町史二」1982
- 角川書店「角川日本地名大辞典 35山口県」1988
- 内田愷「山口県の古代村落・条里遺跡の問題点」『山口考古創立10周年記念特集号』山口考古学会 1983
- 山口県教育財団「とよた」1986
- 山口市教育委員会「湯田条里跡」1991
- 「右田一丁田遺跡の調査」『右田一丁田遺跡、釣場・宮の馬場遺跡、久米市遺跡』山口県教育委員会、1973
- 山口県教育委員会「下右田遺跡第4次調査概報」1980
- 下関市教育委員会「綾羅木川下流域の条里遺構」I・II 1983、1984
- 下関市教育委員会「綾羅木川下流域の地域開発史」1990

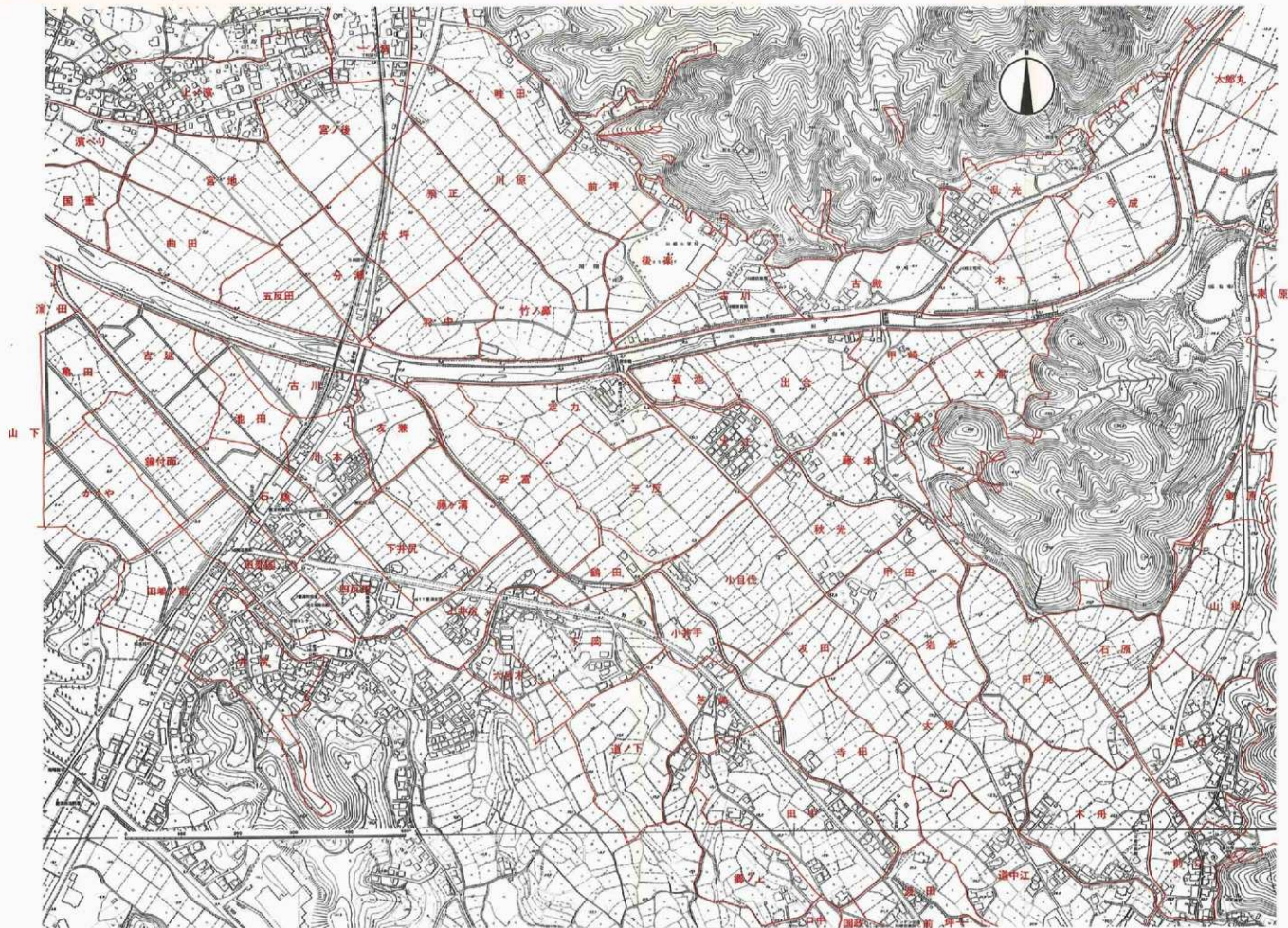


图3 川網系里跡関係小字图

IV 遺構について

1 概要

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居6軒、土坑21基、溝3条、溝状遺構1条、井堰状遺構1基、柱穴約500個である。

葦池地区は遺構は皆無であった。出合地区はIに古墳時代後期の集落跡が展開し、IIの西端に縄文時代晩期とみられる溝と土坑群が分布している。また、IIからIIIにかけて条里制に伴う溝が貫いている。この溝に直交する溝が、出合地区IとIIの間から藤本地区のIとIIの間を通っている。藤本地区ではIIで井堰状遺構と木杭群を検出した。また、縄文時代晩期の包含層から大地に根差したままの姿の樹根が出土している。

2 竪穴住居

6軒の竪穴住居はすべて平面形が方形である。全体に後世の土地利用によって削り取られているため残存状態は極めて悪い。S B01の深さは38cm残っていたものの、他の住居の検出面からの深さは最大でも10cm前後にとどまり、S B02や、S B06の南東辺はほぼ床面が露出した状態で検出した。

S B01 (図11)は、大部分が調査区外で、南東隅の部分のみを検出した。このため全体の規模などはわからないが、周溝とみられる溝を根拠に竪穴住居と判断した。埋土から土師器と須恵器の破片が出土している。

S B02 (図11)も、大部分が調査区外で、南西隅の部分のみを検出した。このため全体の規模などはわからないが、S B01と同じように周溝とみられる溝を根拠に竪穴住居と判断した。埋土は褐灰色(10YR6/1)粘質土である。埋土から土師器片が出土している。

S B03 (図10)は、東西720cm、南側をS K03によって壊され、主柱穴が明らかではない。南東隅に周溝の痕跡がみられ、南北の長さを推定できる(672cm)。西辺で途切れるものの周溝を設置し、北辺の中央に竈を築いている。竈の周辺には焼土や炭とともに土師器(図23)が多数出土した。竈の周辺以外の埋土は黄灰色(2.5Y4/1)粘質土で明黄橙色(10YR6/8)粘質土を含む。

S B04 (図9)は、長軸542cm、短軸443cm。S B05が埋まった後に築かれた住居で、S B05と約47度東にずれて重なっている。主柱穴は4本で、周溝は設けられていない。北西辺の中央に竈を築いており、焼土や炭とともに土師器(図26-129)などが出土している。

S B05 (図9)は、長軸474cm、短軸464cm。S B04より古い時期の住居で、床面がS B04よりも低い。主柱穴は4本で、竈はみられず、周溝は設けていない。埋土は褐灰色(10YR5/1)粘質土で明黄褐色(10YR6/8)粘質土を含んでいる。

S B06 (図11)は、長軸708cm、短軸652cm。主柱穴は4本で、北西辺の中央には竈を築いている。しっかりとした周溝を巡らせているが、北西辺では2本になっている。これは建て替えが1度行われたため、周溝の埋土の様子、竈と周溝の重複の様子から、住居の北西部を76-108cm縮小する建て替えを行ったものと考えられる。その際、北西側の主柱穴は、図11の①から②につけ替えられている。埋土は褐灰色(10YR5/1)粘質土と黄褐色(10YR5/6)粘質土が混在している。竈の周辺から石製の支脚や外来のものとみられる甎などが出土した。

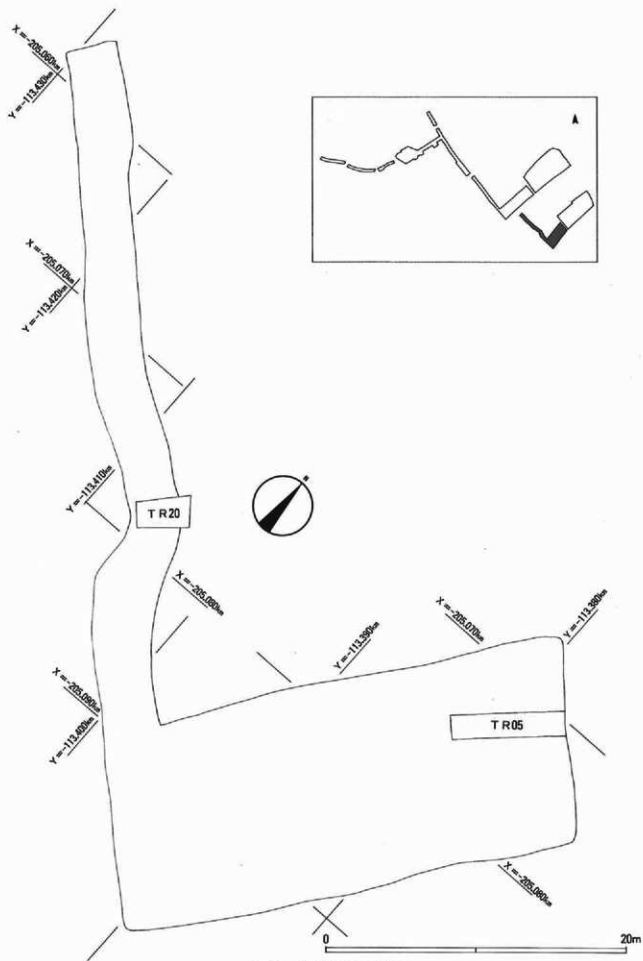


図4 藤本地区 I の様子

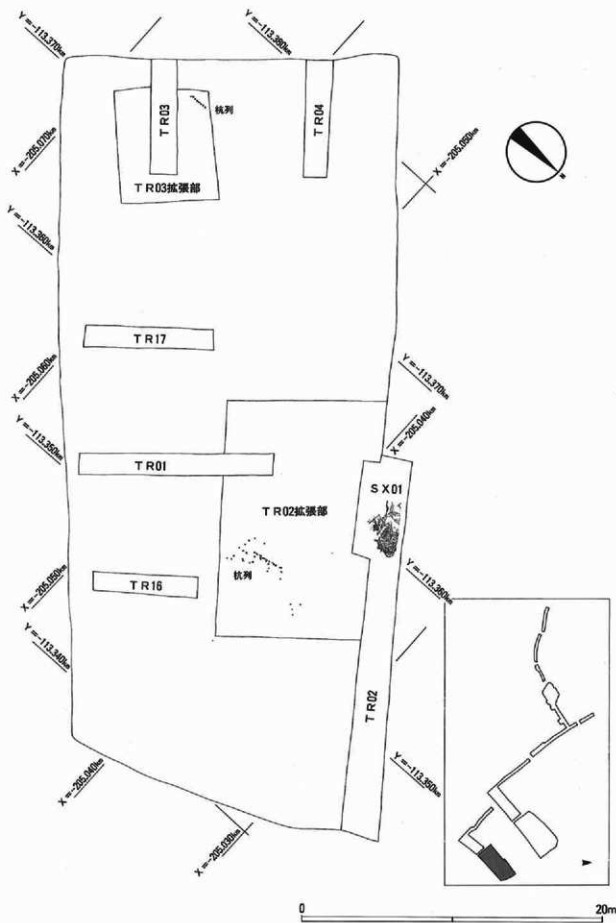


図5 藤本地区IIの様子

3 土坑

21基の土坑はすべて出合地区に分布し、Iで9基、IIで11基、IIIで1基を検出した。

S K01 (図15) は、長軸132cm、短軸71cm、残存する深さ15cm。土師器を多量に含む包含層の下で検出した。埋土は褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土。

S K02 (図15) は、西側の一部を攪乱で失っているが、東西の最長幅671cm、南北の最短幅293cm、残存する深さ39cm。不整形であり、2～4基の土坑が重複していることも考えられるが、埋土は一様に褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土であった。S K01の場合と同じ包含層の下で検出した。

S K03 (図10) は、長軸984cm、短軸450cm、残存する深さ33cm。S B03が埋まった後に掘り込まれている。埋土は黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土で明黄橙色 (10YR6/8) 粘質土を含んでおり、須恵器片と多量の土師器片、土師器の高坏 (図27) が出土している。

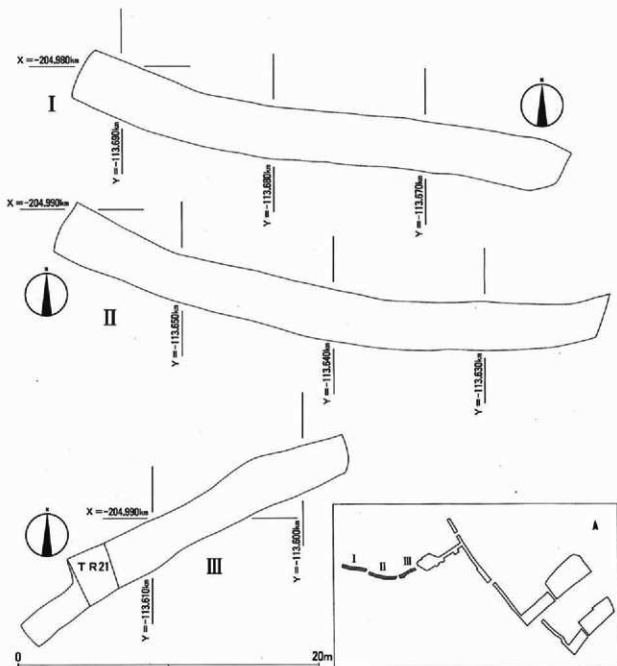


図6 菟池地区の様子

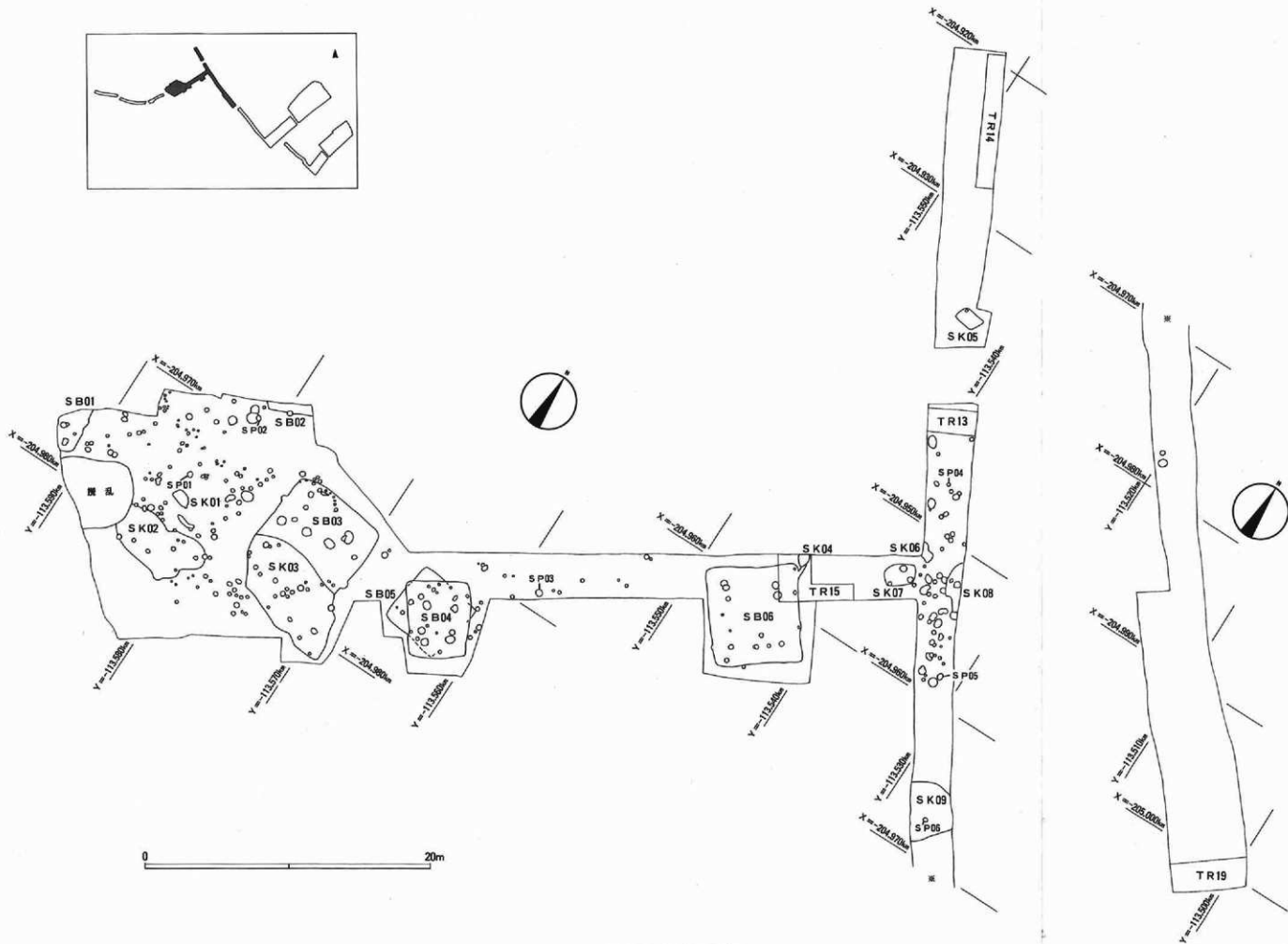
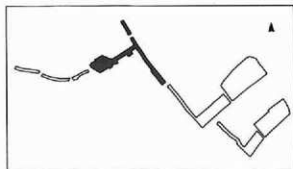


図7 出合地区 I の様子

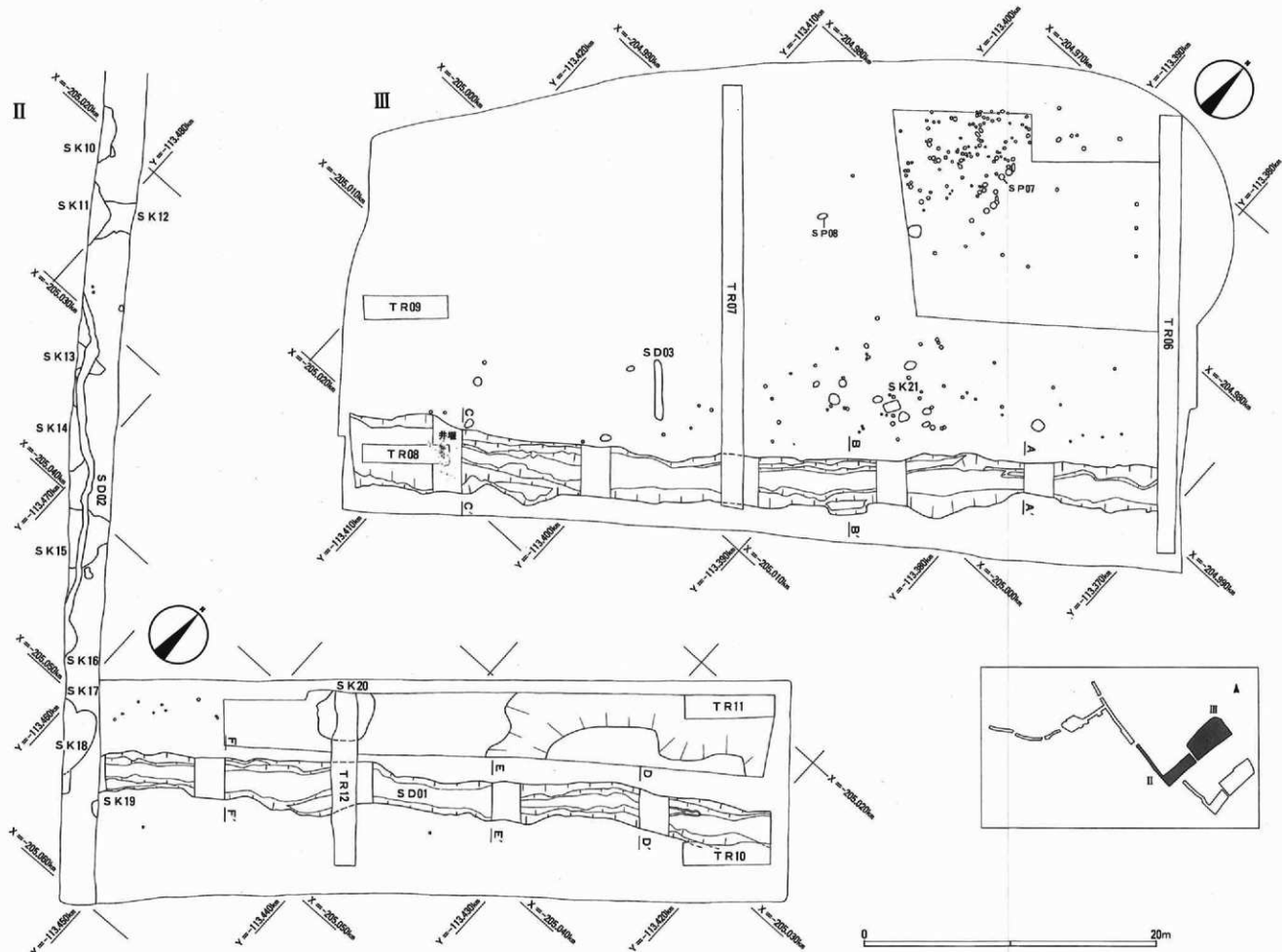


図8 出合地区II・IIIの様子

SK04 (図11) は、東西幅79cm、残存する深さ21cm。北端は調査区外。SB06の北隅からのびる排水溝と重なるが、新旧関係はSB06より新しい。埋土は褐灰色(10YR4/1)粘質土。

SK05 (図15) は、長軸154cm、短軸109cm、残存する深さ8cm。埋土は褐灰色(10YR4/1)粘質土。

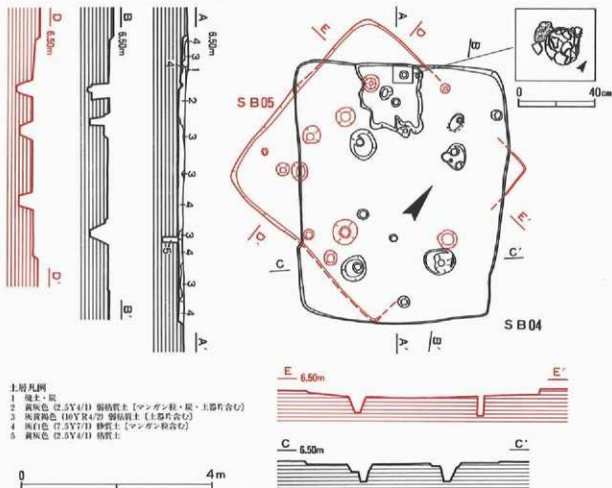
SK06 (図15) は、長軸125cm、短軸64cm、残存する深さ19cm。埋土は褐灰色(10YR4/1)粘質土。縄文時代後・晩期の包含層に掘り込まれていた。SK08 (図15) も同じ状況である。

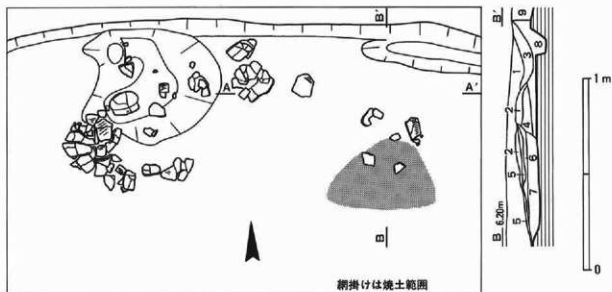
SK07 (図15) は、長軸223cm、短軸154cm、残存する深さ23cm。埋土は灰白色(5Y8/1)粘質土。

SK09 (図14) は、南北の長さ408cm。中央に据えた作業台のような平らな石の周囲に多量の土師器が廃棄された状態で出土。そこにはミニチュア土器や丹塗りの高杯が含まれ、さらに周辺の表面採集遺物にもミニチュア土器や土製模造鏡、長頸壺があるため、祭祀関係の遺構である可能性がある。

SK10~19 (図14・16) は、いずれも出土遺物が極めて少ないが、縄文土器片以外はない。掘り込み面はほぼ同一で、縄文晩期の土坑群の可能性がある。SK20 (図15) も同じ様相を呈する。なお、重複しているSK11・12の新旧関係は、SK12が古く、SK11が新しい。同じくSK17・18は、SK17が古く、SK18が新しい。また、SK13~16を貫くSD02は、いずれの土坑よりも新しいが、土坑群と同様に出土遺物は極めて少なく、縄文土器片以外は出土していない。

SK21 (図15) は、平面形がほぼ長方形で、長軸223cm、短軸130cm。検出面からの深さは19cmで、上面をかなり削り取られている。床面から土師器2点(図27-150・図28-184)が出土している。このような状況から、土坑墓の可能性もある。





網掛けは焼土範囲

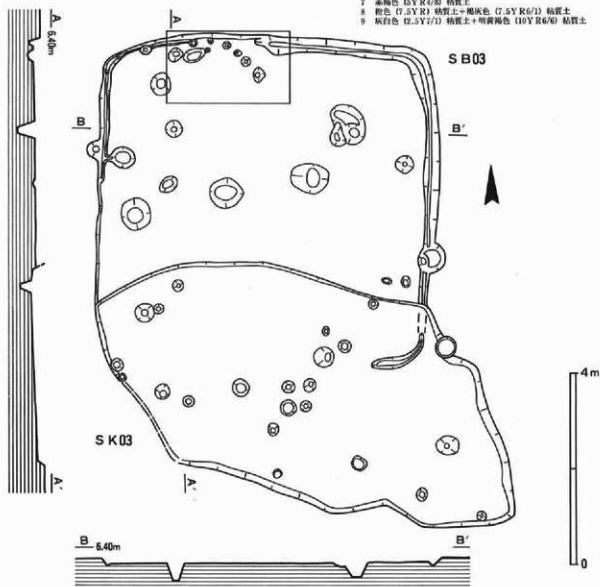


図10 SB03・SK03実測図

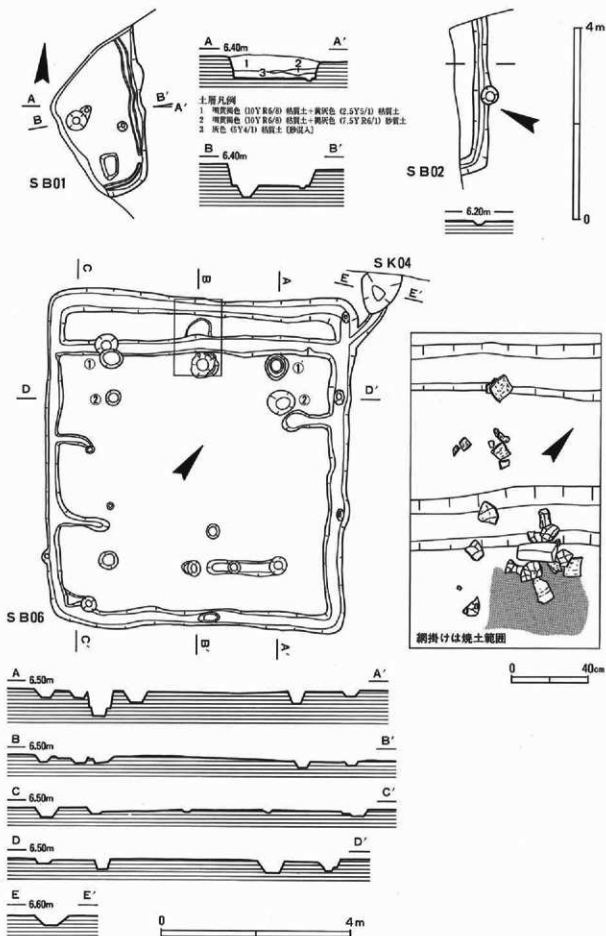
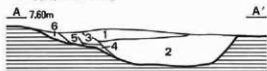


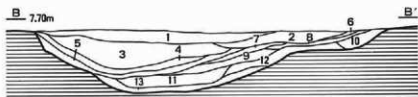
図11 SB01・02・06・SK04実測図

4 坪境の溝

今回の調査区内では、条里制の坪境ラインにほぼ一致する溝を2条確認した。そのうちSD01(図12)は、方位がN52°Eで、出合地区Ⅱ・Ⅲを貫いている。幅は上端で190~536cm、残存する深さは19~74cm。埋土の様相は場所によってまちまちである。当初の断面形は逆台形だが、何度も掘り直して利用している。



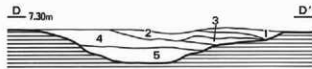
- 土層凡例
- 1 黄褐色 (2.5Y5/3) 腐植質土
 - 2 砂礫
 - 3 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 腐植質土
 - 4 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土
 - 5 にお・黄褐色 (10YR5/4) 土
 - 6 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 腐植質土



- 土層凡例
- 1 灰色 (10Y6/1) 腐植質土 [暗色 (7.5YR6/3) 粘質土含む]
 - 2 灰色 (5Y4/1) 腐植質土 [暗色 (7.5YR6/3) 粘質土含む]
 - 3 灰色 (7.5Y5/1) 腐植質土 [暗色 (7.5YR6/3) 粘質土含む]
 - 4 黄褐色 (2.5Y5/1) 砂質土 [暗色 (7.5YR6/3) 粘質土含む]
 - 5 灰色 (N4/1) 粘質土
 - 6 灰色 (10Y6/1) 砂
 - 7 灰白色 (7.5Y7/1) 砂
 - 8 灰色 (10Y5/1) 凝結質土
 - 9 灰色 (10Y5/1) 腐植質土+灰白色 (7.5Y7/1) 砂
 - 10 灰色 (N4/1) 粘質土
 - 11 灰色 (7.5Y6/1) 砂+灰色 (N5/1) 粘質土+明褐色 (7.5YR5/3) 砂
 - 12 明黄色+灰白色 (2.5Y7/1) 砂
 - 13 灰色 (N4/1) 粘質土+灰黄色 (2.5Y4/2) 砂

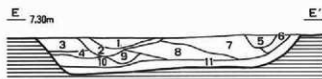


- 土層凡例
- 1 灰色 (10Y6/1) 腐植質土 [暗色 (7.5YR6/3) 粘質土含む]
 - 2 灰色 (7.5Y5/1) 腐植質土 [暗色 (7.5YR6/3) 粘質土含む]
 - 3 灰色 (7.5Y6/1) 砂質土 [暗色 (7.5YR6/3) 粘質土含む]
 - 4 灰色 (7.5Y6/1) 粘質土 [暗色 (7.5YR6/3) 粘質土含む]
 - 5 黄褐色 (2.5Y5/1) 腐植質土 [暗色 (7.5YR6/3) 粘質土含む]
 - 6 灰色 (5Y6/1) 粘質土
 - 7 黄褐色 (2.5Y5/1) 砂質土+灰白色 (2.5Y7/1) 砂の互層
 - 8 灰色 (5Y6/1) 砂質土 [暗色 (7.5YR6/3) 粘質土含む]
 - 9 灰白色 (10YR7/1) 砂+灰色 (N4/1) 粘質土の互層
 - 10 暗灰色 (10YR4/1) 砂質土
 - 11 灰黄色 (2.5Y6/2) 腐植質土 [暗色 (7.5YR6/3) 粘質土含む]
 - 12 暗灰色 (10YR4/1) 粘質土
 - 13 暗灰色 (2.5Y6/1) 砂質土
 - 14 にお・暗褐色 (7.5YR7/3) 砂
 - 15 淡黄色 (2.5Y7/4) 砂
 - 16 暗灰色 (10YR5/1) 砂質土

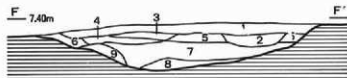


- 土層凡例
- 1 にお・黄褐色 (10YR6/3) 砂
 - 2 暗褐色 (10YR3/1) 粘質土
 - 3 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂
 - 4 黄褐色 (2.5Y4/1) 腐植質土
 - 5 砂礫

7.30m



- 土層凡例
- 1 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂
 - 2 黄褐色 (10YR2/2) 粘質土
 - 3 暗灰黄色 (2.5Y2/2) 砂
 - 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 [暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂含む]
 - 5 暗褐色 (10YR3/2) 粘質土
 - 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土
 - 7 黄褐色 (2.5Y5/2) 砂 [暗褐色 (10YR3/2) 粘質土含む]
 - 8 にお・黄褐色 (2.5Y6/3) 砂
 - 9 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂 [灰黄褐色 (10YR5/2) 腐植質土含む]
 - 10 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂 [暗褐色 (10YR3/1) 粘質土含む]
 - 11 砂礫



- 土層凡例
- 1 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土
 - 2 暗灰色 (N3/3) 腐植質土 [灰白色 (2.5Y7/1) 砂のブロック含む]
 - 3 灰色 (N4/1) 腐植質土 [灰白色 (2.5Y7/1) 砂のブロック含む]
 - 4 灰色 (5Y6/1) 砂
 - 5 灰白色 (2.5Y7/1) 砂+赤褐色 (5YR4/3) 砂
 - 6 暗黄褐色 (5P B4/2) 粘質土
 - 7 灰色 (7.5Y6/1) 砂 [中・小礫を多量に含む]
 - 8 灰色 (7.5Y7/1) 砂 [暗赤褐色 (5YR3/3) 砂・小礫含む]
 - 9 黄褐色 (2.5Y4/1) 粘質土 [灰色 (5Y6/1) 砂含む]

0 2m 図12 SD01土層断面実測図

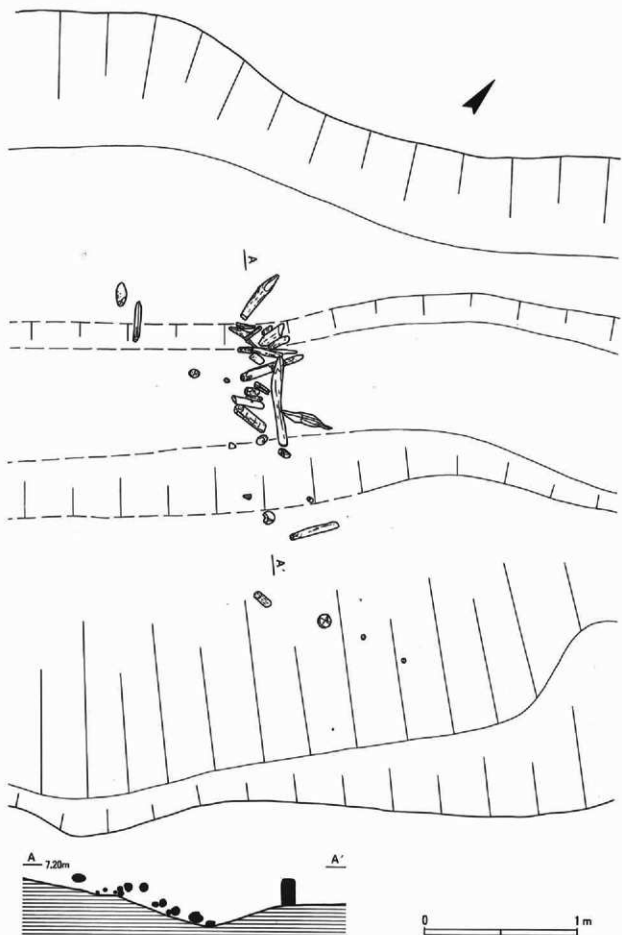


图13 S D01井堰檢出狀況實測圖

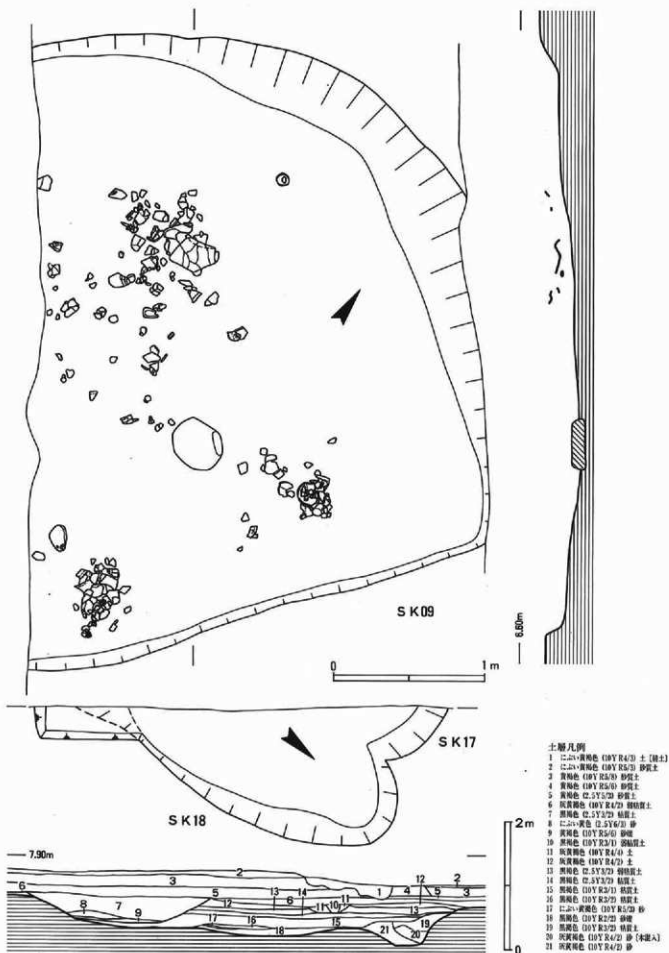


图14 土坑实测图 (1)

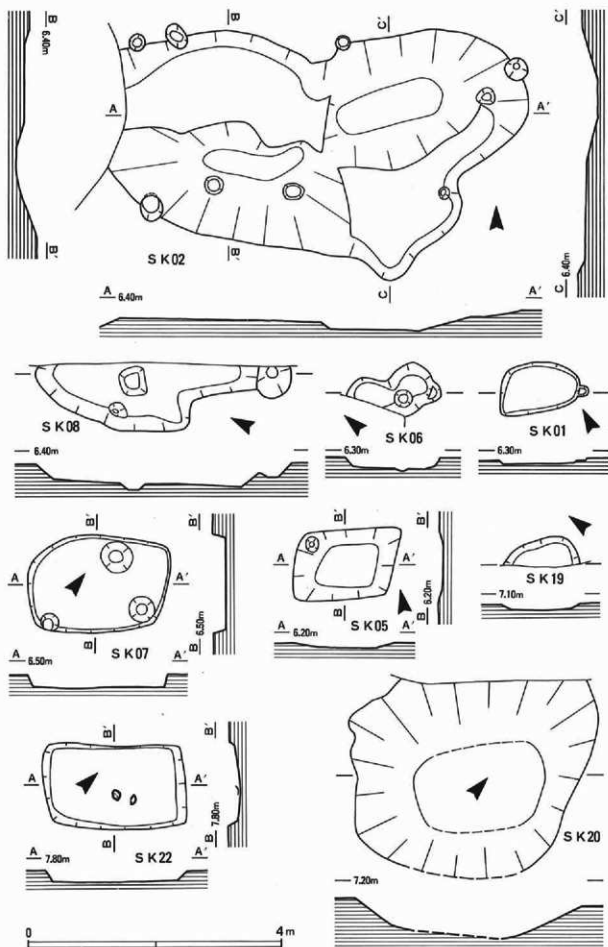


图15 土坑实测图(2)

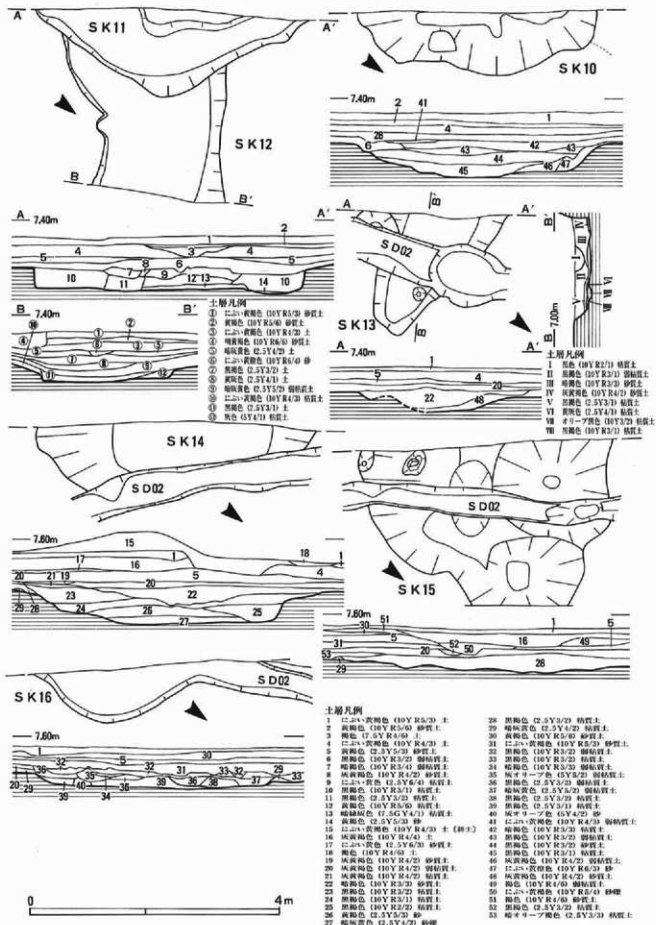
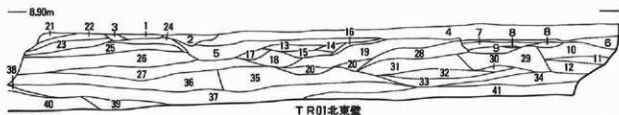


圖16 土坑實測圖(3)



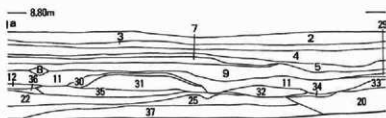
土層凡例

- | | | |
|-------------------------|---|--------------------------|
| 1 土色・黄褐色 (10Y R4/2) 砂質土 | 15 褐色 (10Y R2/1) 弱粘質土+土色・黄褐色 (10Y R5/2) 砂 | 28 褐色 (7.5Y R4/0) 砂 |
| 2 暗灰褐色 (10Y R6/4) 砂質土 | 16 灰黄褐色 (10Y R4/2) 砂 | 29 暗灰褐色 (2.5Y 4/2) 砂 |
| 3 暗褐色 (10Y R2/2) 土 | 17 土色・黄褐色 (10Y R4/2) 砂 | 30 暗褐色 (2.5Y 3/2) 砂 |
| 4 暗褐色 (10Y R2/2) 土 | 18 土色・黄褐色 (10Y R4/2) 砂 | 31 暗褐色 (2.5Y 3/2) 砂 |
| 5 褐色 (10Y R1.7/1) 粘質土 | 19 暗褐色 (10Y R5/2) 砂 | 32 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 砂 |
| 6 暗褐色 (10Y R2/2) 粘質土 | 20 灰黄褐色 (10Y R4/2) 砂 | 33 暗褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土 |
| 7 暗褐色 (2.5Y 3/2) 土 | 21 土色・黄褐色 (10Y R4/2) 砂質土 | 34 暗褐色 (2.5Y 4/1) 砂 |
| 8 褐色 (7.5Y R4/0) 砂質土 | 22 暗褐色 (10Y R2/2) 砂質土 | 35 褐色 (10Y R4/0) 砂 |
| 9 暗褐色 (2.5Y 3/2) 砂 | 23 暗褐色 (10Y R2/2) 砂質土 | 36 暗褐色 (2.5Y 4/2) 砂 |
| 10 土色・黄褐色 (10Y R5/2) 砂 | 24 土色・黄褐色 (10Y R5/4) 土 | 37 褐色 (5Y 2/1) 砂 |
| 11 褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土 | 25 灰黄褐色 (10Y R4/2) 砂 | 38 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 砂 |
| 12 暗褐色 (2.5Y 3/2) 砂 | 26 褐色 (7.5Y R4/0) 砂 | 39 暗褐色 (2.5Y 3/1) 砂 |
| 13 暗褐色 (10Y R2/1) 粘質土 | 27 暗褐色 (2.5Y 3/1) 砂 | 40 暗褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土 |
| 14 褐色 (10Y R2/1) 粘質土 | | 41 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土 |

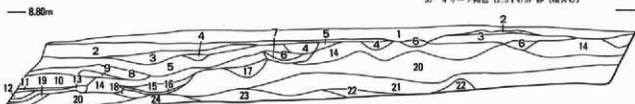


土層凡例

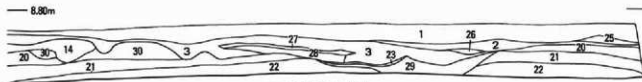
- | |
|------------------------------|
| 1 土色・黄褐色 (10Y R4/2) 土 (礫土) |
| 2 黄褐色 (2.5Y 5/2) 砂質土 |
| 3 褐色 (10Y R4/0) 弱粘質土 |
| 4 土色・黄褐色 (10Y R4/2) 土 |
| 5 暗褐色 (10Y R2/2) 土 |
| 6 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 砂 (礫含む) |
| 7 土色・黄褐色 (10Y R5/2) 砂質土 |
| 8 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 砂 |
| 9 暗褐色 (10Y R4/2) 砂 |
| 10 土色・黄褐色 (10Y R5/2) 砂 |
| 11 暗褐色 (10Y R2/1) 粘質土 |
| 12 暗褐色 (10Y R2/1) 弱粘質土 |
| 13 灰黄褐色 (10Y R4/2) 砂 |
| 14 暗褐色 (2.5Y 3/1) 砂質土 |
| 15 灰黄褐色 (10Y R4/2) 砂 |
| 16 暗褐色 (2.5Y 3/1) 土 |
| 17 暗褐色 (10Y R2/1) 粘質土 |
| 18 褐色 (2.5Y 2/1) 粘質土 |
| 19 暗灰褐色 (2.5Y 5/2) 砂 |
| 20 暗褐色 (2.5Y 2/1) 粘質土 |
| 21 暗褐色 (2.5Y 2/2) 砂質土 |
| 22 灰黄褐色 (10Y R4/2) 砂質土 |
| 23 灰褐色 (2.5Y 4/1) 砂質土 |
| 24 暗褐色 (7.5Y R5/0) 砂 (礫含む) |
| 25 暗褐色 (7.5Y R4/0) 砂 (礫含む) |
| 26 褐色 (7.5Y R4/0) 砂 |
| 27 褐色 (10Y 4/1) 弱粘質土 |
| 28 暗褐色 (2.5Y 6/2) 砂質土 |
| 29 暗褐色 (10Y R4/2) 砂 |
| 30 土色・黄褐色 (10Y R4/2) 砂質土 |
| 31 土色・黄褐色 (10Y R4/2) 砂質土 |
| 32 暗褐色 (5Y R2/4) 砂 |
| 33 灰黄褐色 (10Y R4/2) 砂質土 |
| 34 暗褐色 (10Y R2/2) 粘質土 |
| 35 暗灰褐色 (2.5Y 4/2) 砂質土 |
| 36 暗褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土 |
| 37 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 砂 (礫含む) |



T R02北西壁②



T R02拡張部北東壁



T R02拡張部南東壁

土層凡例

- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------|
| 1 土色・黄褐色 (2.5Y 6/0) 土 | 16 黄褐色 (2.5Y 5/2) 砂質土 (礫) |
| 2 暗灰褐色 (2.5Y 5/2) 土 | 17 暗褐色 (2.5Y 5/2) 砂質土 |
| 3 土色・黄褐色 (10Y R5/4) 土 | 18 暗褐色 (5Y R2/0) 砂質土 |
| 4 黄褐色 (2.5Y 5/2) 土 | 19 褐色 (10Y R4/0) 砂質土 (礫多量に含む) |
| 5 土色・黄褐色 (2.5Y 6/2) 砂質土 | 20 灰褐色 (2.5Y 7/2) 砂質土 |
| 6 灰褐色 (2.5Y 6/2) 砂 | 21 褐色 (10Y R4/0) 砂質土 (礫多量に含む) |
| 7 土色・黄褐色 (10Y R6/0) 砂質土 | 22 暗褐色 (2.5Y 5/1) 砂 (礫含む) |
| 8 灰白色 (2.5Y 7/1) 砂質土 (0.30程度の砂粒) | 23 褐色 (7.5Y R2/1) 粘質土 |
| 9 灰白色 (2.5Y 7/1) 砂質土 (礫) | 24 褐色 (10Y R4/0) 砂質土 (礫多量に含む) |
| 10 灰白色 (2.5Y 7/1) 砂質土 (0.30程度の砂粒) | 25 灰白色 (2.5Y 7/1) 砂質土 |
| 11 灰黄褐色 (10Y R4/2) 弱粘質土 | 26 黄褐色 (2.5Y 5/1) 砂質土 (礫含む) |
| 12 オリーブ褐色 (2.5Y 4/0) 砂質土 | 27 暗褐色 (2.5Y 2/2) 粘質土 |
| 13 暗灰褐色 (2.5Y 5/2) 弱粘質土 | 28 暗灰褐色 (2.5Y 4/2) 砂質土 |
| 14 灰褐色 (2.5Y 7/0) 砂 (礫含む) | 29 灰褐色 (2.5Y 4/1) 砂 (礫含む) |
| 15 オリーブ褐色 (2.5Y 4/0) 砂質土 | 30 暗灰褐色 (2.5Y 4/2) 砂質土 (礫含む) |



図17 トレンチ土層断面実測図 (1)

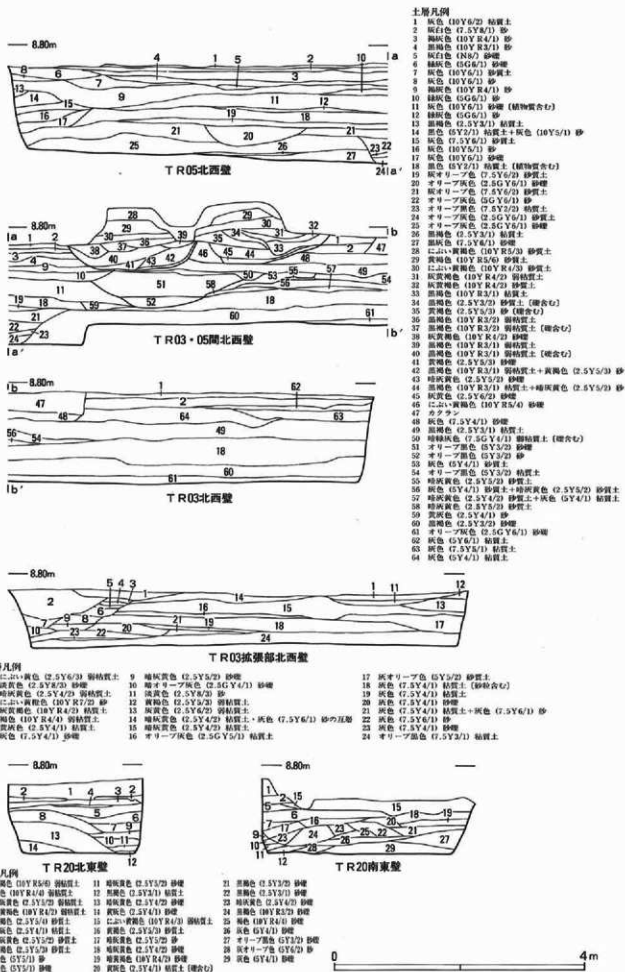


図18 トレンチ土層断面実測図 (2)

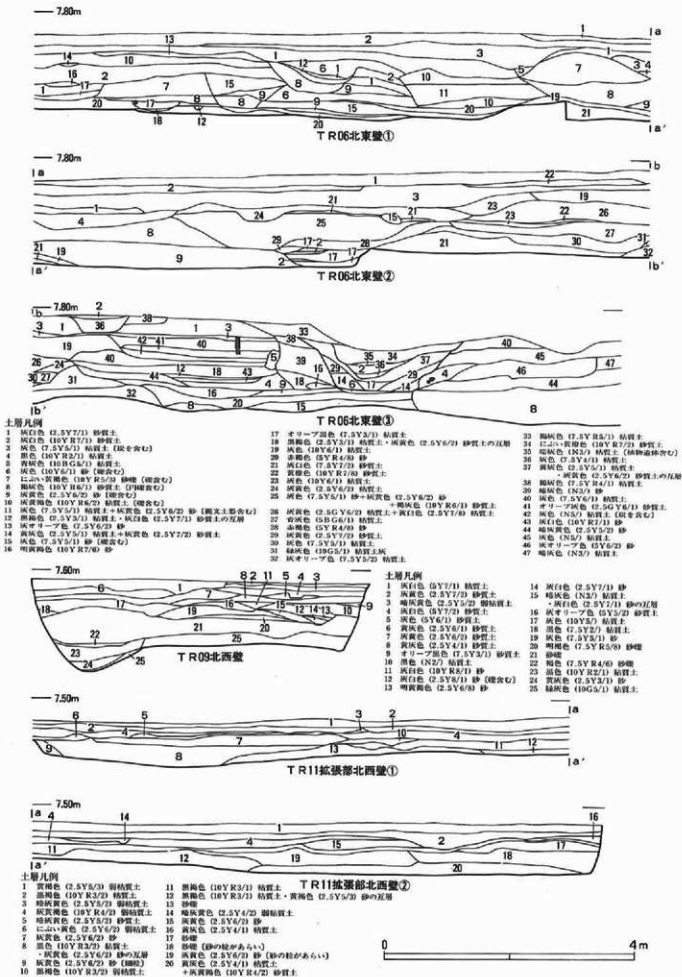
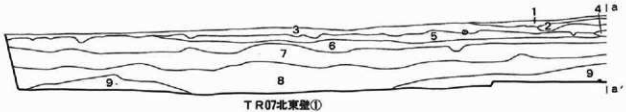


図19 トレンチ土層断面実測図 (3)

— 7.80m



TR 07北東壁①

— 7.80m



TR 07北東壁②

— 7.80m

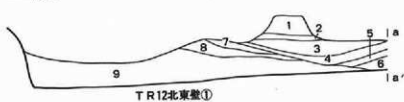


TR 07北東壁③

土層凡例

- | | | |
|---|----------------------------|---------------------------|
| 1 にごい-灰色 (2.5Y 6/2) 砂質土 | 13 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂質土 | 25 灰オリーブ色 (5Y 6/2) 砂礫 |
| 2 明黄褐色 (10Y R 6/0) 砂質土 | 14 灰褐色 (2.5Y 5/1) 粘質土 | 26 灰白色 (2.5Y 7/1) 砂 |
| 3 暗褐色 (10Y R 4/1) 粘質土 | 15 にごい-黄褐色 (10Y R 6/4) 砂質土 | 27 灰褐色 (2.5Y 6/1) 砂 |
| 4 砂礫 | 16 黄褐色 (2.5Y 5/2) 砂 | 28 暗褐色 (10Y R 6/0) 砂 |
| 5 灰オリーブ色 (5Y 6/2) 粘質土 | 17 灰褐色 (10Y R 5/0) 粘結質土 | 29 灰白色 (10Y R 8/3) 粘質土 |
| 6 黄褐色 (2.5Y 5/2) 粘質土 | 18 にごい-灰色 (2.5Y 6/4) 砂質土 | 30 にごい-黄褐色 (10Y R 6/4) 砂 |
| 7 暗黄褐色 (2.5Y 6/2) 粘質土 | 19 にごい-黄褐色 (10Y R 5/4) 粘質土 | 31 灰褐色 (2.5Y 7/2) 砂質土 |
| 8 黄褐色 (5.5R 6/1) 粘質土+明褐色 (7.5Y R 5/6) 粘質土 | 20 灰褐色 (2.5Y 5/1) 砂質土 | 32 灰白色 (7.5Y 7/1) 砂 |
| 9 黄褐色 (5.5R 6/1) 粘質土 | 21 灰色 (7.5Y 6/3) 砂 | 33 暗灰オリーブ色 (2.5G 7/1) 粘質土 |
| 10 灰黄褐色 (10Y R 6/2) 土 (暗緑) | 22 灰色 (5Y 3/1) 砂質土 | 34 褐色 (7.5Y R 6/0) 粘質土 |
| 11 灰黄色 (2.5Y 7/3) 砂質土 | 23 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 粘質土 | 35 灰色 (10Y 3/1) 粘質土 |
| 12 灰色 (7.5Y 6/1) 砂質土 | 24 灰褐色 (2.5Y 6/2) 砂 | |

— 7.80m

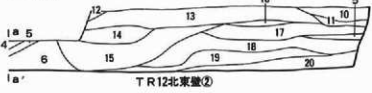


TR 12北東壁①

土層凡例

- | |
|-----------------------------------|
| 1 にごい-黄褐色 (10Y R 5/1) 土 (暗含む) |
| 2 黄褐色 (2.5Y 5/2) 砂 |
| 3 にごい-灰色 (2.5Y 6/2) 砂礫 |
| 4 暗黄褐色 (5Y R 3/0) 砂礫 |
| 5 にごい-黄褐色 (10Y R 6/3) 砂 |
| 6 灰黄褐色 (10Y R 5/2) 砂礫 |
| 7 にごい-灰色 (2.5Y 6/3) 砂 |
| 8 暗黄褐色 (2.5Y 4/2) 粘質土 |
| 9 黄褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土 |
| 10 オリーブ褐色 (5Y 6/2) 粘結質土 |
| 11 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 粘質土 |
| 12 灰黄褐色 (10Y R 4/2) 土 |
| 13 にごい-黄褐色 (10Y R 4/3) 粘結質土 (暗含む) |
| 14 灰黄褐色 (10Y R 6/2) 砂礫 |
| 15 にごい-黄褐色 (10Y R 6/2) 砂礫 (暗含む) |
| 16 灰黄褐色 (10Y R 4/3) 粘結質土 |
| 17 にごい-黄褐色 (10Y R 4/3) 砂礫 (暗含む) |
| 18 にごい-黄褐色 (10Y R 5/4) 砂礫 |
| 19 褐色 (7.5Y R 4/4) 砂礫 |
| 20 にごい-黄褐色 (10Y R 5/2) 砂礫 |

— 7.60m



TR 12北東壁②

土層凡例

- | |
|------------------------------------|
| 1 明褐色 (7.5Y R 5/0) 砂質土 |
| 2 にごい-黄色 (2.5Y 6/3) 砂質土 |
| 3 オリーブ褐色 (2.5Y 4/0) 粘結質土 |
| 4 褐色 (10Y R 4/0) 粘結質土 |
| 5 にごい-黄褐色 (10Y R 5/4) 粘結質土 |
| 6 にごい-黄褐色 (10Y R 4/3) 粘結質土 |
| 7 黄褐色 (10Y R 3/2) 粘結質土 |
| 8 にごい-黄褐色 (10Y R 5/5) 砂質土 |
| 9 灰黄褐色 (10Y R 4/2) 粘結質土 |
| 10 黄褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土 |
| 11 黄褐色 (2.5Y 3/1) 粘結質土 |
| 12 黄褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土 |
| 13 オリーブ褐色 (5Y 2/1) 粘結質土 |
| 14 オリーブ褐色 (5Y 3/1) 粘質土 (きものが細かい) |
| 15 黄褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土 |
| 16 オリーブ褐色 (5Y 2/1) 砂質土 |
| 17 灰色 (7.5Y 4/1) 砂質土 |
| 18 オリーブ褐色 (7.5Y 3/1) 粘質土 |
| 19 オリーブ褐色 (7.5Y 3/1) 粘質土 (きものが細かい) |
| 20 灰色 (5Y 4/1) 砂質土 |
| 21 灰色 (5Y 4/1) 砂 |
| 22 オリーブ褐色 (10Y 3/1) 粘質土 |

— 7.20m



TR 19南東壁

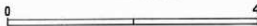


図20 トレンチ土層断面実測図 (4)

SD01では、当初の底面や壁面付近からは8世紀後半～9世紀前半の須恵器が出土しており、後世に掘り直した溝の埋土には主に11～12世紀の土師器などが含まれている。また、TR08の東側で水流によって倒壊した状況の井堰状の木杭群(図13)を検出した。木杭は直径4～8cmで合計29本。一部は直立し、溝の中央付近では互いに接するような間隔である。横木状の木が一本あったが、上流の杭が流されてきた可能性もある。検出状況から取水用の井堰で、水流は北東から南西へ向かっていたものとみられる。

SD01のほかにTR03・05間(図18)でも環境の溝を確認している。前述のとおりこの溝は平面的には検出できなかったが、調査に先立って山口県教育委員会が実施した平成10年度の試掘調査の結果と合わせると、藤本地区のI・II間から、SD01とはほぼ直交して出合地区のI・II間を通っているものと考えられる。この溝の土層断面の51・52層が当初の底面付近である。当初の溝は河川の氾濫などで崩壊し、新たに何度も掘り直して利用している。

5 井堰状遺構

藤本地区IIのTR02で井堰状遺構(SX01)の一部が現れたため、TR02を拡張したところ、根こそぎ倒された状態で検出した。北側が調査区外へ続いているため、全長は不明。樹皮のついたままの杭を20～30cm間隔で並べて横木をわたり、枝木をからませて補強している。横木と杭の一部は柱材を再利用したものとみられる。

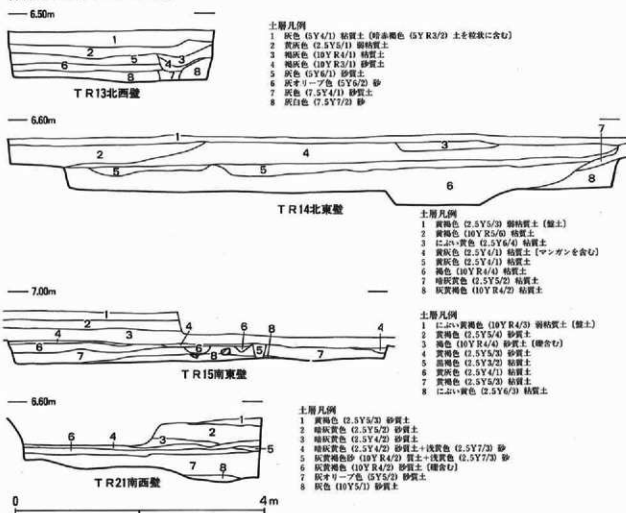


図21 トレンチ土層断面実測図 (5)

杭は径6~14cm、長さは100cm前後のもの、一方が調査区外に出ているため全長はわからないが、120cm以上のものもあった。すべて倒れており、打ち込まれたままの状態のものはなかった。倒れた杭の上に、植物の管状の茎などが毛布で覆うように平たく敷き詰められていた。この茎などは編まれていた様子はないが、同一方向にきれいに並んだ状態であった。

(鈴木)



図22 SX01実測図

V 遺物について

1 土器

①縄文土器 (図23・24、図版12・13)

1・5・9・13は粗製浅鉢、2・4、6・8、11は精製浅鉢である。1は底部がやや上げ底を呈し、体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は弓状に外反しながらほぼ直立し、上端はわずかに外反する。6は外面に赤色顔料の痕跡があり、口縁部外面の凹線間に貝殻で押圧した痕がある。10・12・14~19は粗製深鉢である。18は刻目突帯文土器で、口縁部はほぼ直立した後わずかに外湾気味に立ち上がり、胴部との境は屈折せず緩やかに曲がる。22は精製浅鉢のリボン状突起部分である。28は粗製浅鉢で外面に1条の凹線をもつ。31はいわゆる中津式の粗製有文深鉢で、凹線以下に磨消縄文がみられる。35は有文深鉢の胴部片で、2条の凹線間に磨消縄文がみられる。42・53は椀原式の浅鉢である。46は深鉢の口縁部で、ほぼ直立する可能性もあり、西平式併行期のもとみられる。48は粗製深鉢で、外面に赤色塗彩の痕跡が残る。49は刻目突帯文深鉢である。50は縁帯文浅鉢である。52は無文突帯文深鉢とみられ、波状口縁をなす。54は粗製有文深鉢片とみられる。56は粗製刻目突帯文深鉢である。58は粗製深鉢で口縁直下に焼成前とみられる穿孔がある。60は波状口縁方形浅鉢で、口縁部外面に突帯をもつ。64は北久根山式の有文粗製土器片である。

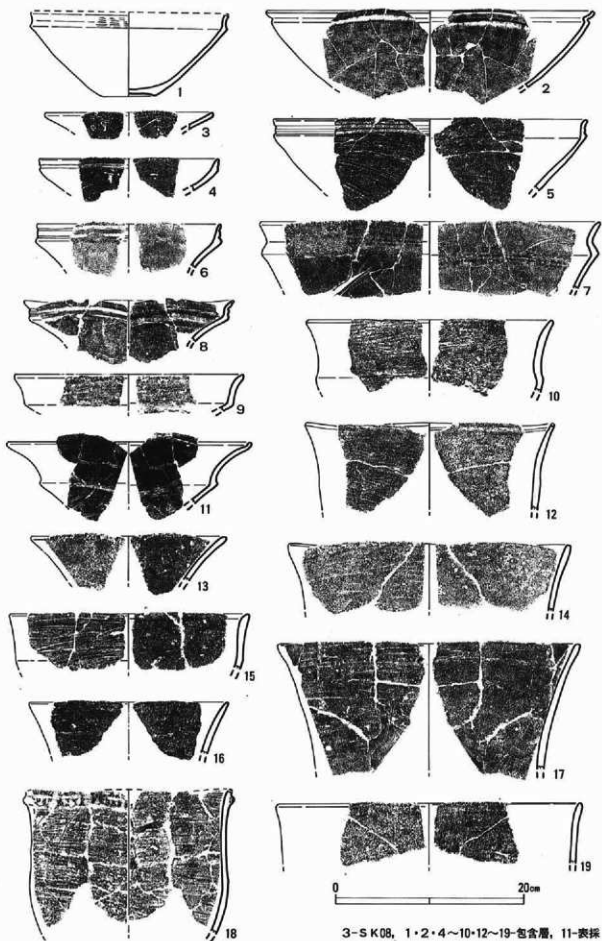
川棚条里跡出土の縄文土器は、一部後期初頭のの中津式や後期中葉の西平式や北久根山式に属するものや晩期後半の刻目突帯文が含まれるが、多くは後期後半から晩期後半の刻目突帯文土器成立直前までのものである。

②弥生土器 (図25、図版14)

72~76・79・83・85・87は壺である。いずれも口縁部と頸部の境や頸部と胴部の境に段をもつ。沈線及び羽状文は貝殻腹線によるヘラ描きであり、器面調整は内外面ともヘラミガキである。83・87は底部外面がややくびれる。77・80・82・84・86・90は甕である。口縁部は短く外反し、82・86・90は口唇部に刻みをもつ。82・84・86は肩部に段をもち、90は一条の沈線を施す。外面はいずれもハケ調整で、わずかに肩が張り気味となる。80・90の底部は厚手の平底である。以上の土器は、前期後半に比定される。78は無頸壺で胴部が弧を描いて内湾して立ち上がり、端部は面をもつ。口縁部外面に平頂の粘土帯を貼付し肥厚させており、口縁部に貫通孔がみられる。類例の少ない異形の土器で、胎土は精製されており、器面の一部に赤彩の痕跡がみられる。柱穴から単独で出土しており、時期は不明である。88は壺で、口縁部が外反し、口唇部はやや拡張する。口唇部に2条の凹線を施し、胴部最上位に斜位の施文を連続して行う。内面は頸部と胴部の境以下をヘラケズりする。瀬戸内系の土器で、後期前半に比定される。89は壺で、複合口縁である。後期後半頃のものである。

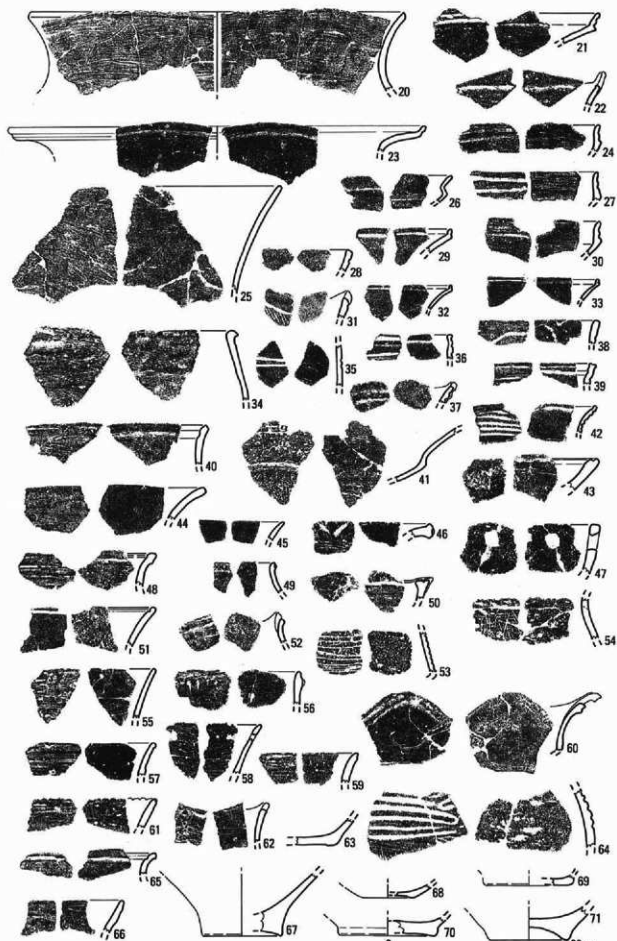
③土師器・須恵器 (図26~28、図版14~16)

92・122は小型丸底壺である。122は扁球形の体部からやや外傾する口縁部が立ち上がり、端部は細くなる。95・98・101・107は甕で、口縁部はくの字状に外反し、端部はやや丸みをもつ。胴部は弧を描いて大きく張り、外面はハケ、内面は頸部以下をヘラケズりする。93・94・96・97・99・100は鉢である。93・94・100は底部は丸底、体部は扁球形を呈する。94は口縁部がやや内湾気味に立ち上が



3-S K08, 1·2·4~10·12~19-包含層, 11-表採

图23 縄文土器実測図(1)



27-S K17, 41-S D01, 54-S P07, 59-S P08, 60-S P05, 68-S P04
 20~26·28~40·43~53·55~58·62~67·69~71-包食層, 42·61-表採

图24 縄文土器実測图(2)

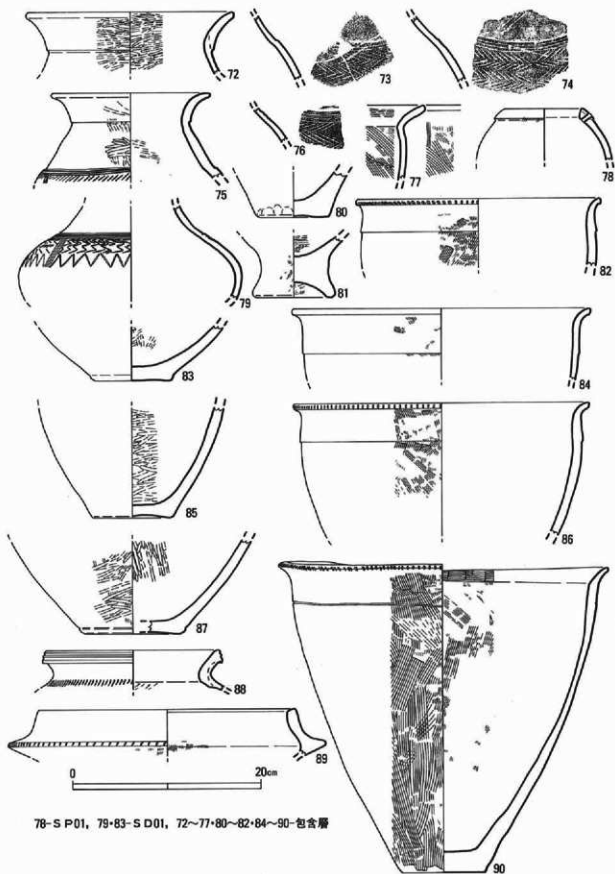
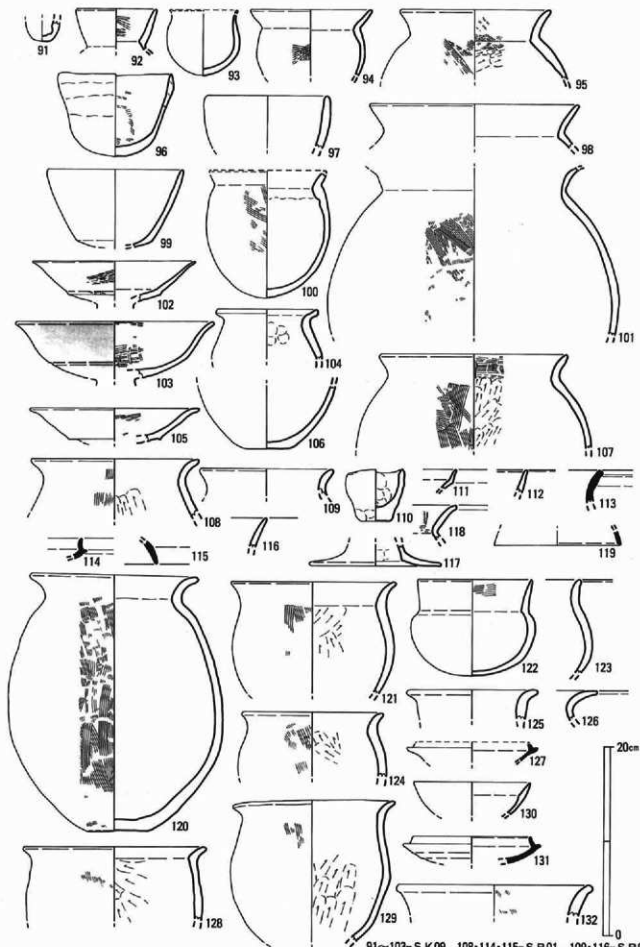


图25 弥生土器実測図



91~103-S K09, 108~114·115-S B01, 109·116-S B02
 110~113·117~123-S B03, 124~129-S B04,
 130~132-S B05 104~107-包舍層

图26 土師器・須惠器実測图(1)

る。96・99は輪積みの痕が明瞭で器面の起伏が大きい。底部は丸底、体部は比較的直線的に立ち上がり、口縁端部は細くなる。外面はタタキの後にナデ、内面はヘラケズリまたはハケ調整である。この形態の鉢は豊浦地域に特徴的な器形の一つとみられる。102・103・148・168は高環である。杯部は屈折部以上の口縁部が比較的長く、端部はやや外反する。器面調整はヘラミガキを基本とする。以上の土師器は、概ね5世紀前半に比定できる。

114・127・131・139・146・159・160・164の杯身は器高が低く扁平である。立ち上がり部は短く端

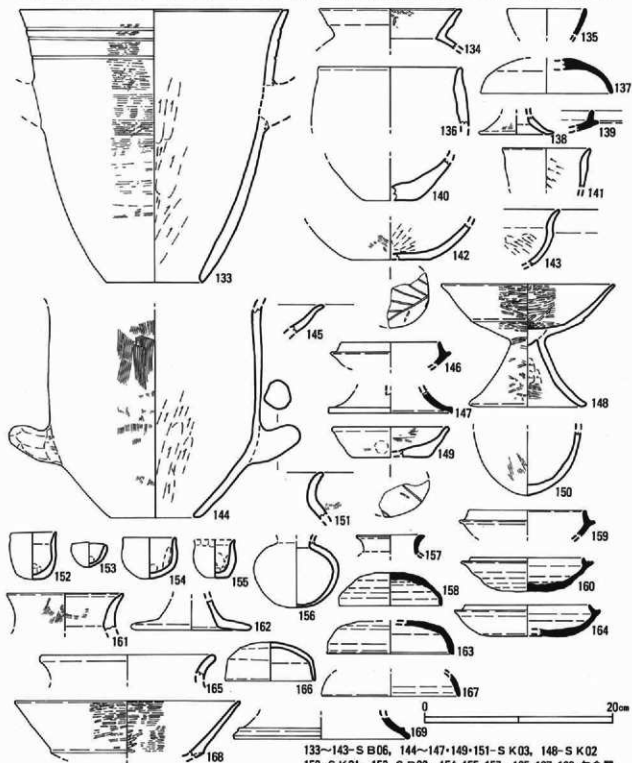


図27 土師器・須恵器実測図(2)

部は丸い。115・119・137・158・163・167の杯蓋は、口縁端部が丸みをもつかまたは不明瞭な面をもつ。133・144は甌である。133は胎土は良く精製され、他の土師器とは明らかに異なる。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反し、端部は少し内傾するシャープな面をもつ。体部の中位よりやや上に取り手の脱落痕がみられる。口縁直下から体部上位に3条の浅い凹線をもつ。外面調整は横方向のハケを基調とし、口縁部は横ナデである。内面は下方から上方へヘラケズリを行い、上位は後に横ナデ調整を行う。共伴する土器からみて6世紀後半のものである。極めて異例の土器であり、外来のものともみられる。144は外面縦方向のハケ、内面ヘラケズリである。142・149は鉢で、底部外面にヘラにより葉脈を描いている。以上の土器は、概ね6世紀後半に比定できる。

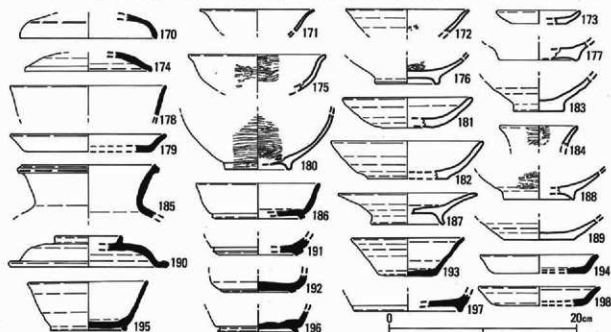
170・174・190は杯蓋、178・186・191・192・193・195・196・197は杯身、179・194・198は皿、185は甌である。171・172・175～177、180・188は椀、173・181・182・187・189は皿である。須恵器の多くは8世紀後半～9世紀前半、土師器の多くは11～12世紀に比定できる。

2 木製品 (図29、図版16)

いずれも縄文時代後・晩期の包含層より出土した。199は割材から柄と身を作り出しており、下端は楕状に仕上げている。踏み込むための肩が明瞭でないため、ここでは掘り棒としておきたい。200は木胎漆器の容器片で、外形はやや扁平な球形を呈するが、全形は明らかでない。片側平坦面の中央付近でやや内部に向かって下ることから、口が狭く内面が深く抉れた容器であるとみられる。内外面とも下地に茶色系漆を塗布し、外面には赤漆で文様を描いている。文様は剥落のため明らかでないが、曲線や接点の様子から椀原式文様に類似するものとみられる。なお鑑定により、材はニワトコであり、下地は生漆の可能性が高く、赤色顔料は水銀朱であることが判明した。201は容器片で、外形は舟形を呈し、内部を削り抜いて椀状に作り出している。

3 石製品 (図29～31、図版17・18)

202は蛇紋岩製の大形磨製石斧で、基部を欠失する。器面は丁寧に研磨しており、刃こぼれがみら



170～183-S D01, 184-S K21, 185・187・189・191・192・195・197・198-包含層, 186・188・190・193・194・196-表採

図28 土師器・須恵器実測図(3)

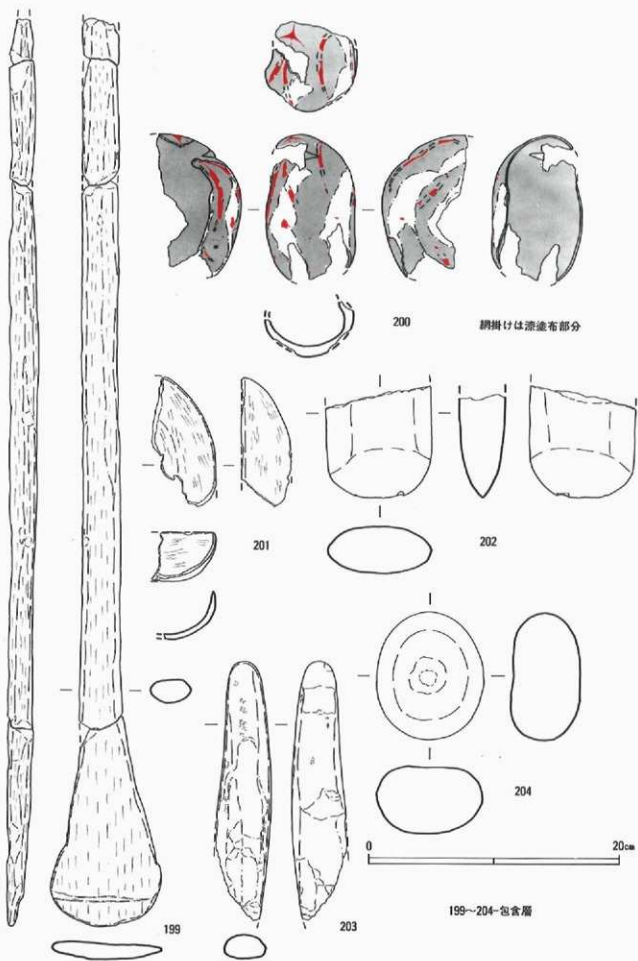
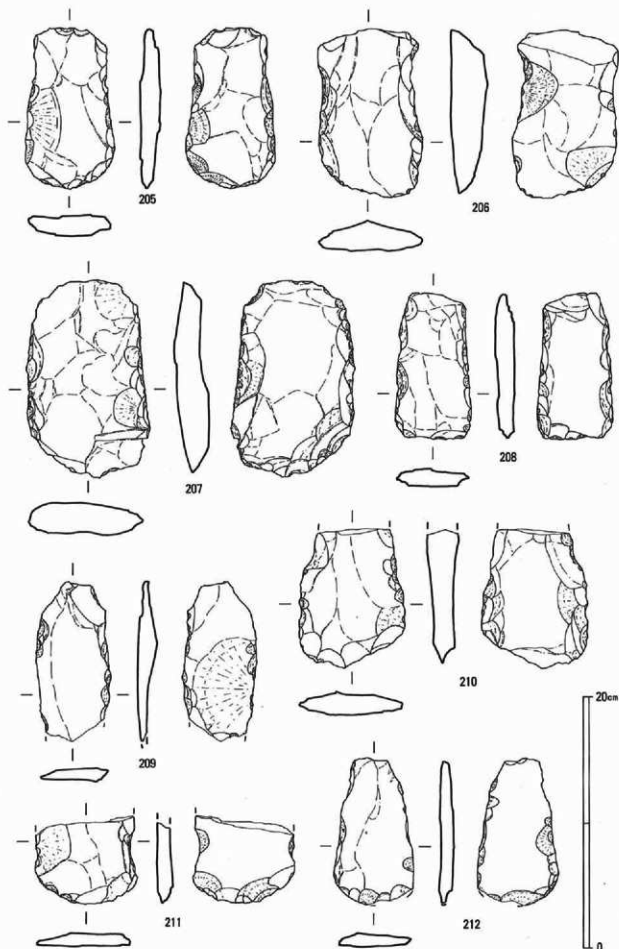


図29 木製品・石製品実測図



205~207·209·210·212-包含層, 208·211-表採
 圖30 扁平打製石斧實測圖(1)

れる。203は泥岩製の磨製石斧または石刀の一部とみられ、器面に擦痕が残る。204は花崗岩製の磨石で、片面の中央が浅く凹む。205～216は赤色頁岩製の扁平打製石斧である。完形品とみられるのは4点で、205が207g、206が384g、207が502g、208が152gである。刃部をわずかに欠損する212は109gである。このうち、207は厚みや剝離の粗さからみて未製品の可能性がある。大まかにみると、最大厚が1.5cm以下のやや小ぶりであり、薄いものとやや大ぶりで最大厚が2cmを超えるものがあり、刃部に刃こぼれがみられるものがある。なお、赤色頁岩の剥片が多数出土しており、遺跡内で製作したものと考えられる。217～230は石鏃である。219・221・228・229は平基無茎式、217・218・220・222・223・224・225・226・227・230は凹基無茎式であり、中でも225・226・227は脇挟が深い。石材は217・218・225・227は黒色黒曜石（腰岳産か）、224・226は姫島産黒曜石、219・220・221・222・223・228・229・230は安山岩系である。完形または完形に近いものの重量は、217が0.4g、218が0.5g、219が0.4g、220は2.2g、221は0.4g、222は0.9g、223は0.7g、224は0.9g、227は1.7g、228は0.9g、229は2.2g、230は1.8gである。遺跡内から出土した黒色黒曜石剥片は287点-60.2%（総重量572g-57.5%）、姫島産黒曜石剥片107点-22.4%（総重量282g-28.4%）、安山岩系剥片は83点-17.4%（総重量140g-14.1%）である。これらの剥片には、縄文時代・弥生時代の両者が混在しているが、縄文土器の出土量が弥生土器より圧倒的に多いことから、縄文時代後・晩期の地域的傾向に近い数値と考えている。231は泥質片岩製の磨製扁平両刃石斧で、刃部に刃こぼれがみられる。

4 ガラス小玉 (図32)

232はやや扁平なガラス小玉で、藍色の色調を呈する。

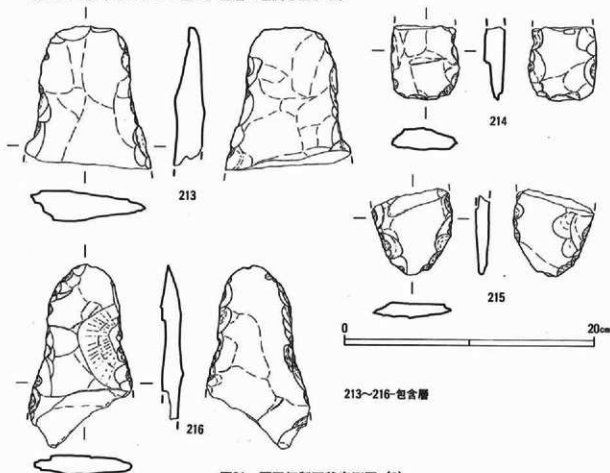


図31 扁平打製石斧実測図 (2)

5 土製品 (図32、図版18)

233は片側の端部を欠失するが、截頭紡錘形を呈し、内部に貫通孔をもつ。小型の土錘とみられる。

235~238は土製模造鏡である。236は鏡背面にヘラ描きの放射状沈線がみられる。

6 鉄製品 (図32)

239・240は錐の先端部、241・242は基部であり、2個体分にあたとみられる。

(石井)

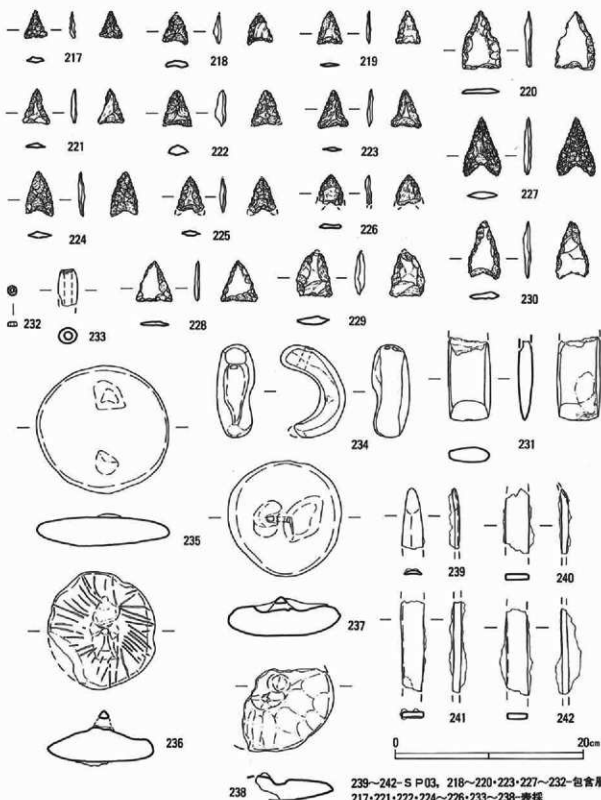


図32 石製品・鉄製品・土製品実測図

VI ま と め

1 はじめに

豊浦山地を源流として響灘に注ぐ川棚川の下流域には、砂丘や洪積台地、丘陵を取り囲む比較的広い沖積低地が形成されている。この低地に現存する地割から、川棚川兩岸に糸里制遺構が展開していることが指摘されていた¹⁾。この川棚糸里跡の発掘調査初年度である今回の調査対象地区周辺は、向^こ畔^はというが、便宜上小字名を踏まえて、菰池地区、出合地区、藤本地区と呼称する。

菰池地区はⅠ・Ⅱ・Ⅲに分けた。いずれも川棚川の支流江良川の氾濫原で遺構は全くなかった。

出合地区はⅠ・Ⅱ・Ⅲに分けた。ⅠとⅡの周辺には、河川の浸食を免れた微高地が残されていたものとみられ、Ⅰには古墳時代の集落跡が広がっている。全体に後世の土地利用によってかなり削られているが、最も菰池地区に近いS B01だけは比較的良好に残っていた。これは微高地の縁辺部にあたり、遺構の掘り込み面が下がっていたためであろう。また、Ⅱには縄文時代晩期とみられる土坑群が分布していた。このほかに、糸里制の坪境にあたとみられる溝が、ⅡとⅢを貫いている。

藤本地区はⅠ・Ⅱに分けた。とくにⅡでは、流路とみられる砂礫層が幾重にも重なっており、この地区一帯が古くから、江良川の氾濫などの影響を何度も被っていたことがわかる。その中で、井堰状遺構(S X01)を検出した。このすぐ南に矢板と杭が並んで打ち込まれていたが、S X01とは直接関係がなく、別の流路に伴うものとみられる。また、Ⅰ・Ⅱ間の現在の用水路の下に、糸里制の坪境にあたとみられる溝を確認した。

以下、時代別に今回の調査成果をまとめる。

2 縄文時代

県内の縄文時代の遺跡の発見例は少なく、川棚糸里跡周辺でも、後期の土器が出土したといわれている厚島遺跡、松原遺跡²⁾が知られていただけであった。しかし、近年の開発に伴って発掘調査した法仙庵遺跡、吉永遺跡で、縄文時代の遺構、遺物が発見されている。法仙庵遺跡では、包含層から晩期の突帯文土器が出土している³⁾。これは中ノ浜遺跡周辺でも発見されている⁴⁾。吉永遺跡では、後期後半～晩期の遺物とともに建物跡や土坑を検出している⁵⁾。

今回の調査では、出合地区Ⅱの西端に土坑群と蛇行する溝を検出した。これらの埋土に含まれていた土器は、いずれも小片で数も少なかったものの、縄文土器以外は全くみられなかったため、晩期の遺構としたい。この地区を含め、出合地区Ⅰの東部、Ⅱ、Ⅲ及び藤本地区Ⅰの南西部からⅡにかけて多くの縄文土器が出土している。主に後期後半から晩期後半の突帯文土器が出現するころまでのもので、若干それよりも古いものもみられる。また、赤色頁岩製の扁平打製石斧、黒曜石や安山岩製の石鏃、蛇紋岩製の大型磨製石斧などの石製品が出土した。赤色頁岩、黒曜石、安山岩の剥片や未製品も多数出土しており、集落内で石製品を製作していたものとみられる。

出合地区Ⅱでは漆器片、掘り棒、容器といった木製品も出土した。漆器片については、容器の木材はニワトコ(スイカズラ科)で、下地は生漆で木固めした可能性が高く、茶色系の漆を塗った上に水銀朱を顔料とした朱漆で模様を描いている⁶⁾。

藤本地区ⅡのT R03拡張部では、後・晩期の包含層から大地に根差したままの姿のシイノキ風の樹

根が出土した。同じTR03拡張部の南東壁で①灰色粘質土層(古代)、②黒褐色粘質土層(縄文時代晩期)、③オリーブ黒色粘質土層(縄文時代晩期以前)の3試料について花粉分析を行った。その結果、検出した花粉・胞子総数が、①17、②7、③260で、①、②は極端に少なかった。この原因は水流による流出か乾燥による酸化分解にあるとみられる。③ではシノキ属が約40%で最も多く、マツ属が約33%、クリ属約10%、アカガシ亜属約9%、ヤマモモ属、モチノキ属なども1%未満で存在するという結果が出た。このほか、出合地区ⅡのTR11拡張部の縄文時代晩期の層である8・9層と漆器片が出土した10・11・12層(図19)から出土した植物種子の樹種同定も行った。その結果、個数としては落葉樹のエゴノキが圧倒的に多いが、分類群数では常緑樹の割合が多く、クリ、マツ属も含まれていた。

これらの調査成果から周辺の縄文時代晩期の植生を復原すると、次のようなことがいえる。すなわち、シノキ属、アカガシ亜属、クスノキ科を主体とし、ヤマモモ属、モチノキ属などを含めた照葉樹林が成立している一方、マツ属、クリも比較的広く分布している。また、エゴノキが出合地区Ⅱ周辺に多く生育している。なお、3cmにも達する大型のクリ果実が出土していることから、栽培とまでは断言できないものの、何らかの形で人の管理下で生育していた可能性がある¹⁰⁾。

3 弥生時代

出合地区ⅢのTR06で前期後半の裏が良好な状態で出土したため、TR06を拡張して周辺を精査したが、これに関係するとみられる遺構はなかった。このほか、藤本地区Ⅰでもこの時期の土器が出土しているが、いずれも包含層からの出土である。しかし、状態が良好なものが多く、近くに集落などが営まれていた可能性が高い。

藤本地区ⅡのTR02拡張部で検出したSX01は、流路に設けられた井堰であろう。並べて打ち込んだ杭に横木をわたして固定する構造の井堰は、各地の弥生時代～古墳時代の遺構で発見されている。また、SX01では、水流を遮断するために井堰の構造物を植物の茎などで覆っていた。この類例としては金山遺跡(北九州市)¹¹⁾があげられる。金山遺跡の場合は、カヤや木の皮、ワラを使用しているが、SX01の場合は、ススキ属やチガヤ属などのウシクサ族の植物を使っている¹²⁾。

SX01は、東から西への水流によって根こそぎ倒された状態で検出されており、打ち込まれたままの杭はなかったためいわゆる直立型か合掌型かは判別できない。SX01の周辺一帯は多数の流路が複雑に入り組んでおり、何度となく河川の氾濫などに襲われたことがうかがえる。SX01が設けられていた流路は、こうした度重なる氾濫などのため、ほとんどその痕跡を残していない。そのためSX01の時期を明らかにすることは困難だが、SX01を含む層が弥生時代後期の土器を含んでいること、中期以前の遺物が周辺から出土していないことから、後期あるいは後期以降に比定したい。なお、この周辺で出土した弥生土器の状態は悪く、水流によってかなり移動しているものとみられる。

SX01の南西に、カーブしながら並んでいる木杭、矢板列を検出した。これはSX01とは別の流路に関係するものである。この一角に杭と矢板で長方形に囲んだところがある。これはカキ遺跡(北九州市)¹³⁾で検出されている木材貯蔵用遺構のような施設だった可能性もある。ただし時期は不明。

4 古墳時代

出合地区Ⅰの集落跡には、堅穴住居6軒、土坑9基を検出しているが、①須恵器を含まない遺構と②須恵器を含む遺構に大別できる。①に属する遺構はSB03・05、SK01・02・09で、出土した土師

器から5世紀前半に比定できる。②に属する遺構はSB01・02・04・06、SK03で、出土した須恵器から6世紀後半に比定できる。①の住居は2軒ともほぼ南を向いて並び、②の住居はすべて南東を向いている。その他の遺構は、SK04がSB06より新しいものであることがわかるほかは、時期を示す決め手に欠け、①と②の時期の間を埋める要素はみられない。以上のことから、5世紀前半に営まれた集落は一時廃絶し、6世紀後半に再び形成されたといえる。

5 古代以降

条里遺構とみられるものは、SD01と、それと出合地区II・III間で直交するとみられる溝である。SD01は、何度も掘り直して利用されているが、当初の溝を設置した時期は8世紀後半～9世紀前半まで潤る可能性が高い。その後掘り直された溝から出土する遺物は、11～12世紀のものが中心で、9世紀後半～10世紀の遺物が極めて少ない。

このような時間的な空白については、平安海進による気候不順と関連する可能性も考えられる。平安海進は、古墳時代後期から始まって平安時代末にピークに達する。海進時も海退時も気候が不安定になり、洪水が頻発する。日本でも9～10世紀には水害が多かったといわれる。下関市の綾羅木川下流域でも、このピーク直前に台地から流れ出た土砂によって埋まったことがわかっており⁽¹⁾、これを裏付けるものである。川棚条里跡でも、前述したように藤本地区で流路が形を失うほどの河川の氾濫が繰り返されていたことが認められ、この時期は農地としては放棄されていたのではないだろうか。

SD01と直交する溝も、当初の溝はSD01と同じ時期に設置したものとみられる。しかしその後、ほとんどが埋没した時期を経て何度も掘り直されている。SD01と異なる点は、最終的な溝の埋没が中世にまで下ることである。この溝に対応する、山口県教育委員会の試掘調査で確認した溝でも同じ状況が確認されており、SD01の最終的な廃絶後も排水路として機能していたものとみられる。

6 おわりに

調査期間中の6月末、山口県西部は記録的な集中豪雨に襲われた。川棚でもあちこちで小河川の氾濫や土砂崩れによる被害が多発し、発掘現場も多大な被害を受けた。こうした水害に何度も打ちのめされながら、それに耐えて立ち上がってきた先人の生命力の強靭さを、今回の調査では痛感した。

今回の調査で川棚条里跡の一部を垣間見ることができた。さらに、来年度以降続行する調査によって資料を蓄積し、川棚条里跡の全容解明に一步でも近づきたい。

(鈴木)

註

- (1) 豊浦町史編纂委員会『豊浦町史二』1982
- (2) 豊浦町史編纂委員会『豊浦町史』1979
- (3) 豊浦町史編纂委員会『豊浦町史三 考古編』1992
- (4) 山口県埋蔵文化財センター『吉永遺跡』1998
- (5) (4)及び山口県埋蔵文化財センター『吉永遺跡(III-東地区)』1999
- (6) 漆器片の樹種鑑定、塗料の構造観察と赤色顔料の分析については、関元興寺文化財研究所に委託した。
- (7) TR03掘張部出土の樹根とTR11掘張部出土の種子の樹種同定、TR03掘張部採取試料の花粉分析については、応用地質株式会社へ委託した。
- (8) 関北九州市教育文化事業団『金山遺跡VI区』1996
- (9) 関北九州市教育文化事業団『金山遺跡I・V区』1999
- (10) 関北九州市教育文化事業団『カキ遺跡』1992
- (11) 下関市教育委員会『綾羅木川下流域の地域開発』1990

報告書抄録

ふりがな	かわたなじょうりあと (こもいけちく・であいちく・ふじもとちく)
書名	川棚条里跡 (菰池地区・出合地区・藤本地区)
副書名	平成11年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第18集
編集著者名	鈴木 卓 相山茂樹 石井龍彦
編集機関	財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060
発行年月日	西暦2000年3月28日 (平成12年3月28日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川棚条里跡 (菰池地区・ 出合地区・ 藤本地区)	豊浦郡豊浦町 大字川棚	35443		34°8'43"	130°56'10"	19990506 ↓ 19991108	7,000	ほ場 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
川棚条里跡 (菰池地区・ 出合地区・ 藤本地区)	集落跡 生産遺跡	縄文時代 古墳時代 古代	堅穴住居跡 土坑 溝 井堰状遺構 柱穴	6軒 21基 3条 1基 約500個	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 土製品 木製品 (漆器・容 器・壺り棒) 石製品 (石鏃・石斧・磨石) 鉄製品	古代の条里制 の坪境とみら れる溝を検出

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第18集

川棚条里跡

(菰池地区・出合地区・轟本地区)

—平成11年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

2000年3月

編集・発行 財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
(山口市春日町3番22号)

印刷 兎玉印刷株式会社
(宇部市明神町3丁目4番3号)